

札幌国際大学  
地域・産学連携センター一年報  
第5号

札幌国際大学  
地域・産学連携センター

札幌国際大学  
札幌国際大学 地域・産学連携センター年報  
第5号

## 目 次

### <事業報告>

1. 令和2(2020)年度 浦河町・札幌国際大学地域連携事業  
[子育て支援分野] 公開講座①「親子体操教室、幼児期からの学びの土台づくり事業講座」  
[子育て支援分野] 公開講座②「造形遊びイベント・公演」  
林 二士・朝地 信介 ..... pp1-10
2. 令和2(2020)年度 奨励研究 調査研究報告 [今金町]  
地域課題に焦点を当てたリーダー育成に関する実証的研究  
～リーダー育成モデルプログラムの検討～  
佐久間 章・赤川 智保・田部井 祐介・横山 克人・栗野 祐弥・本多 理紗  
..... [pp1-2], pp1-47
3. 令和2(2020)年度 地域・産学連携センター共同研究  
学生の学びを基軸とした地学協働に関する可能性に関する共同研究  
池ノ上 真一・阿部 啓子・佐々木 清美・田村 こずえ ..... pp1-14
4. 令和2(2020)年度 地域・産学連携センター共同研究  
一般社団法人北海道商工会議所連合会との人材育成に関する産学連携プロジェクト報告書  
～早期の企業訪問による、就業・キャリア意識向上についての研究～  
原 一将・小林 純・石田 麻英子  
一社)北海道商工会議所連合会 ..... pp1-15

## 【2020(令和2)年度地域連携事業の目的】

[子育て支援分野] の取り組みとして、学生の保育技能向上に関わる課題解決型学習の成果発表の機会となる学生企画の「公開講座」と、子どもの学力・運動能力等の基礎力向上につながる「学びの土台づくり」講座を行う。また浦河町の保健衛生・福祉介護・子育ての人材誘致につなげる機会として、地域の特色や産業、就業環境への理解を深める。

## 【担当】

林二士 [子育て支援分野] 公開講座① 親子体操教室、幼児期からの学びの土台づくり事業講座  
朝地信介 [子育て支援分野] 公開講座② 造形遊びイベント・公演

## 【[子育て支援分野] 公開講座】

◇日程：2021年2月8(月)・9(火)・10(水)

日時	スケジュール・場所	備考(食事等)
1/25(月)		
12:10	両ゼミ合同打ち合わせ(浦河町参加)	ZOOM
2/8(月)1日目		
10:30	ゼミごと打ち合わせ・事前準備	大学各教室
12:30	バス配車・荷物積み込み	大学
13:00	大学出発	休憩(新冠)
16:00	浦河町着・会場設営・両ゼミ合同リハーサル	文化会館
18:30	AERU着・チェックイン・夕食	AERU・レストラン
2/9(火)2日目		
7:30	朝食・各自準備など	AERU・レストラン
8:45	出発	
9:00	文化会館着・準備	文化会館
10:00	イベント①運動遊び(約40分)	
10:45	イベント②制作遊び(約45分)	
11:30	イベント終了・掃除	
12:00	昼食	弁当(ばんばかばん)
13:00	学生向け研修(乗馬体験・乗馬療育学習)	乗馬公園ほか
18:00	AERU着・夕食	AERU・バーベキューハウス
20:00	星空観察・記念撮影	JRA展望台付近
2/10(水)3日目		
7:30	朝食・各自準備など	AERU・レストラン
8:40	チェックアウト・出発	
9:00	文化会館着・準備	文化会館
10:00	イベント①運動遊び(約40分)	
10:45	イベント②制作遊び(約45分)	
11:30	イベント終了・撤収作業	
12:00	昼食	弁当(さっちゃんハウス)
※	運動ゼミ：B☆Bとの体操動画撮影	
13:30	浦河町出発	休憩(新冠)
16:30	大学着・荷物降ろし・解散	大学

◇会場：浦河町総合文化会館（浦河町大通3丁目52 TEL0146-22-5000）

文化会館ふれあいホール（メイン会場）、和室1・2・3（準備・控室）、第3研修室（学生控室）

◇参加学生：朝地ゼミ（造形表現コース13名）・林ゼミ（運動遊びコース12名） 計25名

◇対象：2/9 荻伏保育所・東部保育所 幼児約25名

2/10 東町保育所・フレンド幼稚園 幼児約30名

◇担当：浦河町役場子育て医療課 小林課長、早坂さん

◇移動：大型バス（60人乗り）

◇宿泊：2月8～10日（2泊3日間）

うらかわ優駿ビレッジAERU（浦河町西舎141-40 TEL01462-8-2111）

◇費用：浦河町および札幌国際大学地域連携センター予算より支出

◇イベント時のコロナウィルス安全対策

(1)運動あそび

- ・学生には1人ずつ、マスクと共にフェイスガードを着用する。
- ・運動遊びの前に、手指の消毒を徹底し、子どもへの接触への対策をする。
- ・集合や整列、移動する際には各個の距離をとるよう動線を工夫する。
- ・サポートのため制作遊びコースの学生も1名ずつつく。
- ・複数の子どもが触れるものはこまめな除菌をする。

(2)制作遊び

- ・学生には1人ずつ、マスクと共にフェイスガードを着用する。
- ・使用する場所を区切るため、学生1名ごとにシート（1.8×1.8m大のブルーシート）を敷き、活動の範囲を決める。
- ・シート1枚につき原則子ども1～2名に参加してもらう。
- ・対応する学生が入れ替わらない（接触を減らす）ようにする。
- ・制作自体は子どもだけでもある程度進められる内容として、学生は子どもの制作の補助役としてつく（サポートのため運動遊びコースの学生も1名ずつつく）。
- ・使用する用具はシートごとに一式（はさみ、のり、テープ、ホチキスなど）をカゴに入れて用意し、参加者同士の用具の共有を減らす。また、材料もシートごともしくは複数の置き場所を用意し、人が入り混じらないように工夫する。

◇イベント時以外（移動・宿泊・食事）の安全対策

- ・【三密回避、マスク、消毒】の徹底。
- ・原則として北海道の警戒ステージ（レベル3）に合わせた安全対策と、大学の対面授業実施と同様の安全対策、および使用する各施設の安全対策・安全基準に沿う。
- ・参加者（学生・教員）のイベント2週間前（1/25～）からの検温、体調チェックを行う。  
⇒ゼミごとに、1/25の週の週末、2/1の週の週末に、担当教員が学生に確認する【全員必須】
- ・検温、体調チェック期間中に継続した発熱・体調不良があったり、イベント当日に発熱・体調不良がある場合は不参加。【相談・申告必須】

◇イベント中止の要件

- ・北海道の警戒ステージ4または緊急事態宣言に相当する状況になった場合。
- ・イベント前に、大学の学生間で感染が発生した場合、および浦河町の関係者間で感染が発生、または町内で感染が拡大した場合。

## ◇公開講座① 運動遊び『レッツ！エンジョイ！うらかわオリンピック』

オリンピック競技にあるスポーツをモチーフに体操、まねっこ遊び、かけっこ競争など楽しく体を動かす遊びを実施した。

### (1) 「さぁ！でかけよう」体操

ゼミ活動においてオリジナルの「さぁ！でかけよう」体操を作成、動画撮影し、その動画DVDを事前に浦河町の幼稚園や保育所に配布した。今回の講座に参加した子どもたちはそれを練習してきており、学生と一緒に体操を楽しんだ。またその体操を浦河町「幼児期からの学びの土台づくり事業」における運動遊びの動画資料にするため、ファイターズ B☆B との動画撮影をした。



### (2) 2月9日・10日(2) 2/9(火)・10(水) イベント実施

- ・入室とともにチーム分けをし、4チームを組んでおく。
- ・オリンピックについて触れ、今回の運動遊びや競技の内容を説明する。
- ・「さぁ！でかけよう」体操は、上手にできたか競う競技として子どもたち一緒に行う。
- ・「ドンじゃんけん」として、ラダーや巧技台を使用してコースをつくり、チーム対抗戦を行った。
- ・「聖火リレー」として、聖火をモチーフとしたバトンを受け渡すチーム対抗リレーを行った。



## ◇公開講座② 制作遊び『みんなでへんしん！わくわく隊！』

子どもと学生の協同で、たくさんの材料を組み合わせせてお面と服を作り、動物やお菓子など色々なものに変身して遊ぶ企画を実施した。

### (1) 2/8(月) 会場設営・リハーサル



### (2) 2/9(火)・10(水) イベント実施

当日の主な内容・手順は以下の通り。

- ・試作品を身に付けて学生登場。イベントの内容と制作の仕方を説明する。
- ・子どもが作りたい作品と材料を選び、用意したシート上で制作を進める。学生は制作の補助を行う。
- ・完成した作品を身に付けて、学生が子どもにインタビューする形式で制作したものを紹介し合う。
- ・子どものグループごと、子どもと学生などで集合写真を撮影する（人同士の距離に注意して）。
- ・材料が欲しい子どもには材料を分け、袋に入れて持ち帰ってもらう。
- ・あと片付け





#### ◇学生向け研修

浦河町の地域の特色や療育の取り組みへの理解を深めるため、浦河町が『乗馬療育講座・引き馬体験』『アイススケート体験』『イーグルウォッチング・星空観察講座』を準備し、学生が参加した。

#### (1)浦河町乗馬公園乗馬療育講座・引き馬体験



(2)アイススケート体験



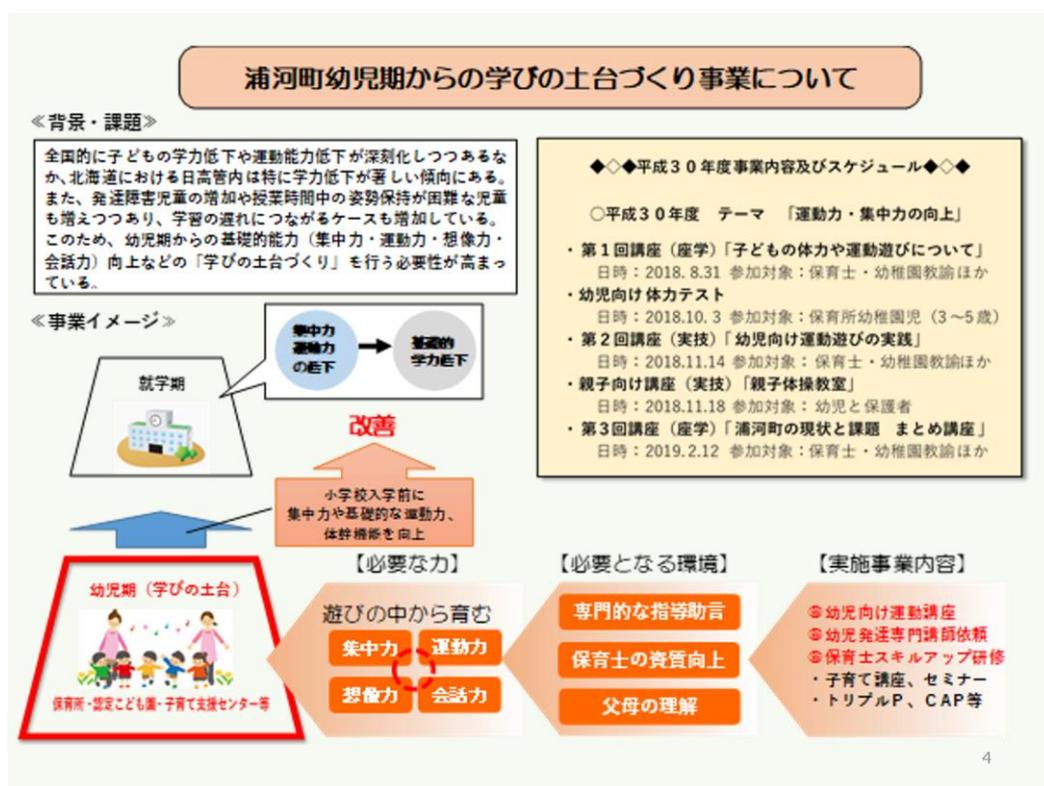
(3)イーグルウォッチング・星空観察講座



全国的に子どもの体力や運動能力の低下が指摘される中、北海道の子どもの体力・運動能力は全国平均を下回っている。また全道における日高管内の学力低下や、体力・運動能力の低下は著しい傾向にあり、浦河町においても深刻な状況となっている。浦河町ではその改善策として、子どもたちの学びに向かう姿勢や意欲、基礎体力の向上を目指すことを目的に、平成30年度より「幼児期からの学びの土台づくり事業」を開始した。

この事業では「幼児の運動遊び」を契機とし、町内の幼稚園・保育所の幼児の運動能力調査、町内の保育士向けの講座、親子向けの講座、子育てサークルへの講座などを展開し、令和元年、令和2年と継続され3年目の事業となる。

本年はコロナウイルスの影響から、予定されていた事業が中止となる中、各園で行われている運動能力調査、2月の本大学とのイベント、まとめの講座を開催した。



**令和元年度  
幼児期からの学びの土台づくり事業**

- 第1回 令和元年7月  
**運動遊びの指導実践（各園・所）**
- 第2回 令和元年10・11月  
**幼児運動能力調査（町内保育所等 3～5歳児対象）**
- 第3回 令和元年10月19日  
**親子体操教室「家庭でできる運動あそび」** タオル
- 第4回 令和元年11月13日  
**乳幼児向け教室（親に向けてミニ講習）**  
**指導実践の観察とQ&A（保育士向け実践講座）**
- 第5回 令和2年2月18日  
**活動の振り返りと次年度に向けて**

**令和2年度  
幼児期からの学びの土台づくり事業**

- 令和2年10・11月  
**幼児運動能力調査（町内保育所等 3～5歳児対象）**
- 令和3年2月9・10日  
**浦河町×札幌国際大学 地域連携事業  
運動遊び・制作遊びイベント**
- 令和3年2月17日  
**活動の振り返りと次年度に向けて**

【メディア掲載】 \*こちらで掲載された記事は、WEB掲載での使用許可をいただいております。

◇広報うらかわ 2021年3月号



平成30年度から浦河町が実施する「幼児期からの学びの土台づくり事業」の研修会を役場で開催し、町内の幼稚園・保育所の教員ら19人が今年度の活動を振り返りました。

事業連携する札幌国際大学の林二士先生とビデオ会議システムでつなぎ、今年度の運動能力調査結果を確認。各園から「子どもたちの運動能力に合わせた目標設定が難しい」など、課題について報告がありました。

林先生は「目標設定には幅を持たせ、子どもたちができることを引き出していくことが大事」と話していました。

2/17 水曜日  
学びの意欲を  
幼児期から  
学びの土台づくり事業

## 浦河町×札幌国際大学 地域連携事業

人形劇公演などで連携を進めている札幌国際大学の短期大学部幼児教育保育学科の学生25人が来町し、学生が考案した2種類のおそびを実施しました。

体操おそび「うらかわオリンピック」は、オリンピックを模して体操や聖火リレーなどをグループ対抗で実施。製作おそび「みんなで変身！ワクワク隊！」は、画用紙などで作ったお面と服で動物やお菓子里に変身し、その姿を全員で披露しました。

事業には浦河町特別アドバイザー B☆B も加わり、参加した4園の子ども達は学生らと元気いっぱい楽しい時間を過ごしました。



2月9日～10日

浦河町特別アドバイザー The HOME MIRAI TAISHI PROJECT

活動内容は、町ホームページやB☆Bのブログで随時発信しています。

The HOME B☆B  
みらい大志 Diary

令和3年度まで浦河町特別アドバイザーとして活動するB☆Bが毎月浦河町を訪問しています。2月のB☆Bの主な活動内容をお知らせします。

B☆B 活動報告 #7

2月9日



目標の障害飛越  
80cmをクリア!

馬文化の魅力発信のため、JRA日高育成牧場で乗馬の練習に励むB☆B。この日の障害飛越の練習では目標の80cmを見事クリア!本格的な乗馬練習を開始してから半年ほどで、めざましい上達を見せています!

2月9日-10日

子どもたちと一緒に運動遊び!

文化会館で町内の保育所を対象とした浦河町と札幌国際大学との地域連携事業「みんなで変身!ワクワク隊&レッツ!エンジョイ!うらかわオリンピック」に参加したB☆B。学生考案の「製作遊び」と「体操遊び」を子どもたちと一緒に行いました。

2日目の午後は、町のイメージキャラクター「うららん」「かわたん」も加わり、学生考案の体操動画を学生の皆さんと一緒に撮影。この体操動画は子ども達の運動遊びの題材として、町内の保育所に配布するほか、町公式YouTubeチャンネルで公開する予定です。



町内で食レポをお願いします!  
町内の人気スポットをもっと行ってみたいはどうでしょうか?

浦河のおいしいお店の食レポは、これからどんどんやっていきます!  
町内の人気スポット... 遠にどんな場所がオススメなのか、ぜひ教えてくださいね!

いつも応援しています。  
浦河赤十字看護専門学校にもいつか来てほしいです!

浦河での活動はあと1年以上あるんで、いろんな施設へ行ってみたいですね!どんどんリクエストください!

B☆Bからのお返事コーナー  
メッセージBOXに寄せられた声に対するB☆Bのお返事を紹介します。(Mio内に掲示)



URAKAWA TOWN SPECIAL ADVISOR

広報うらかわ | 6



◇ファイターズ B☆B ブログ (The HOME B☆B～みらい大志プロジェクト～)

2021-02-12 浦河町×札幌国際大学。

<https://www.bbthehome.com/thehome/urakawa/20210212221102/>

◇YouTube 浦河郡浦河町チャンネル

2021/03/12 おともだちといっしょに体操しよう！ [浦河町×札幌国際大学×B☆B]

<https://www.youtube.com/watch?v=yDkeX-U0L4c>

2021/03/15 夢中で遊んで、学びに向かうのびのび保育♪ | 2020 | The HOME B☆B～みらい大志プロジェクト～

[https://www.youtube.com/watch?v=J9osgTeC\\_DQ](https://www.youtube.com/watch?v=J9osgTeC_DQ)

【過年度事業内容】

◇2016(平成 28)年度

- ・ 4/15 協定締結 (浦河町役場)
- ・ 6/25・26 [観光分野] 地域 PR プロジェクト 浦河かつめし・特産品販売 (札幌国際大学)
- ・ 12/7・8 [子育て支援分野] 公開講座 人形劇・ハンドベル合同公演 (浦河町総合文化会館)

◇2017(平成 29)年度

- ・ 6/24・25 [観光分野] 地域 PR プロジェクト 浦河餃子羽根付き餃子丼・特産品販売 (札幌国際大学)
- ・ 6/18 [スポーツ分野] 健康講座「肩こり解消！ストレッチング」(浦河町総合文化会館)
- ・ 2/6・7 [子育て支援分野] 公開講座 人形劇公演 (認定こども園夢の国幼稚園・保育園、雛菊保育園)

◇2018(平成 30)年度

◎ [子育て支援分野] 幼児期からの学びの土台づくり事業講座

- ・ 8/1「子どもの体力や運動遊びについて 浦河の現状と課題」 浦河町生涯学習センター 町内保育士など関係者 25名

- ・ 11/14 「幼児の運動遊び」実技講座 浦河町ふれあい会館 町内保育士など関係者 25 名
- ・ 11/14・15 「幼児運動能力検査」 浦河町ファミリーサポートセンター  
町内保育所・幼稚園の3歳～5歳児 220 名
- ・ 11/1 親子体操教室「家庭でできる運動遊び」浦河町堺町体育館 町内在住の3～5歳児親子 30 組
- ・ 2/12 振り返りの講座 浦河町役場 町内保育士など関係者 25 名
- ◎2/12～14 [子育て支援分野] 公開講座 人形劇公演（東町保育所、東部保育所、荻伏保育所）

◇2019(令和元)年度

- ◎ [子育て支援分野] 幼児期からの学びの土台づくり事業講座
  - ・ 7/10～24 運動遊びの巡回指導実践 町内幼稚園・保育所 6 か所  
町内園・所 園児 保育士など関係者 30 名
  - ・ 10・11 月「幼児運動能力調査」  
町内保育所・幼稚園の3歳～5歳児 220 名
  - ・ 10/19 親子体操教室「家庭でできる運動あそび」 浦河町堺町体育館  
町内在住の3歳～5歳児がいる親子 30 組
  - ・ 11/13 乳幼児向け教室（親に向けてミニ講習）  
町内在住の3歳～5歳児がいる親子 30 組
  - ・ 2/18 振り返りの講座 浦河町役場 町内保育士など関係者 25 名
- ◎2/16～18 [子育て支援分野] 公開講座 人形劇公演（くるみ保育所、フレンド幼稚園）

令和 2(2020)年度 奨励研究 調査研究報告

地域課題に焦点を当てたリーダー育成に関する実証的研究  
～リーダー育成モデルプログラムの検討～

札幌国際大学

## 目 次

I 研究概要	1
1 研究の目的	
2 研究組織	
3 推進体制	
4 調査研究方法・スケジュール	
II 活動概況	4
III 調査研究の成果と課題	11
1 地域課題を通じた課題解決型学習によるリーダー育成について	
2 リーダー育成におけるピアサポートの効果	
3 今金プロジェクトとカリキュラムへの導入	
IV コロナ禍における教育研究活動の実際について	29
V 今年度の調査研究を終えて	34
【資料】 FW・事後アンケート	35
【参考】 今金町と札幌国際大学の地域連携事業	46

# I 研究概要

## 1 研究の目的

本学では、今年度より中期目標の達成に向けて中期計画に即した取組が行われている。中でも、カリキュラムの改定【69】及びリーダー育成【70】は、スポーツビジネス学科にとって確実に目標達成すべき重要な課題であることから、令和4(2022)年度スタートの新カリキュラムに向けて学科内に委員会を設け、改定作業に着手しているところである。従前からの学科カリキュラムの特徴である理論と実践の往還サイクルをより発展させ、実際の地域フィールドにおいてリーダーとしてのスキルの伸長を図るアクティブラーニングによる実践的な科目の新設を検討している。

一方、本学と地域連携協定を平成 24(2012)年度に締結した今金町は、農業が盛んで日本一の「今金男爵」など多くの農産物をはじめ、美しい自然環境、歴史的史跡も数多く残されており、地域資源に恵まれた自治体である。しかし、少子高齢化や人口減少をはじめ、地域資源の有効活用など、地域課題が山積している状況にある。

そこで本研究は、地域連携協定のもと、本学と多彩な連携事業を展開してきた実績のある今金町をフィールドとして、地域課題の解決のために、情報収集、課題設定、企画立案、実施、評価の一連の過程を通して、地域資源の活用や魅力を発信する方策を提案する。さらには、地域課題の解決に焦点を当て、リーダー育成モデルプログラムを検討し、新カリキュラム作成の資料等を得ることを目的として実施する共同研究である。特に、今年度については、人口減少と高齢化のすすむ小規模集落における高齢者の健康をテーマに、健康の維持及び介護予防の観点から、解決方策の検討に取り組む。

## 2 研究組織

本研究は、以下の者が担当する。

(代表) スポーツ人間学部スポーツビジネス学科 教授 佐久間章  
スポーツ人間学部スポーツビジネス学科 教授 赤川智保  
スポーツ人間学部スポーツビジネス学科 講師 田部井祐介  
スポーツ人間学部スポーツビジネス学科 講師 横山克人  
スポーツ人間学部スポーツビジネス学科 助教 粟野祐弥  
スポーツ人間学部スポーツ指導学科 講師 本多理紗

## 3 推進体制

本研究は、スポーツビジネス学科所属教員が中心となり、学科のリーダー学生をモデルに試行実施する。なお、スポーツ指導学科所属本多教員については、前年度のプロジェクトで3年ゼミ学生(今年度4年生)が今金町民への健康指導を行ったという実績があることから、スポーツビジネス学科学生へのピアサポートの効果検証をするために、参画する。スポーツビジネス学科の1年生を4グループに分け、各グループにスポーツビジネス学科2年生をグループリーダーとして配置する。さらに、スポーツ指導学科4年生をグループサポーターとして2年生のリーダーとしての動きを支援する役割として配置した。なお、今金町は、まちづくり推進課が連絡調整の担当窓口となった。

## 4 調査研究方法・スケジュール

本研究は、研究担当者がそれぞれの学生グループを担当し、学生の活動を参与観察すると共に事前事後のアンケート調査やヒアリング等を通して、地域課題の解決に焦点を当てたリーダー育成モデルプログラムや、新カリキュラム作成の資料等を得る。

### (1) 活動グループ

学生を4つのグループに分け、スポーツビジネス学科の2年生をリーダーに位置づけ、協議の進行をはじめとするグループの活動や運営を担うこととした。また、スポーツ指導学科の4年生は、前年度の今金プロジェクトに参画している学生であることから、今金町の実態もある程度把握している。そこで、4年生には、グループ活動の支援ではなく、2年生グループリーダーのサポートを役割とした。言わば、2年生リーダーの行動をチェックし、より良いグループ活動に繋がるように助言・指導を行う。

【表1】グループ編成と役割

G	所属学科	学年		役割等
1	スポーツ指導学科	4年	男	全体リーダー・Gサポーター
	スポーツビジネス学科	2年	男	学科リーダー・Gリーダー
	スポーツビジネス学科	1年	男	
	スポーツビジネス学科	1年	男	
	スポーツビジネス学科	1年	男	
2	スポーツ指導学科	4年	男	Gサポーター
	スポーツ指導学科	4年	女	Gサポーター
	スポーツビジネス学科	2年	男	Gリーダー
	スポーツビジネス学科	1年	女	
	スポーツビジネス学科	1年	男	
	スポーツビジネス学科	1年	男	
3	スポーツ指導学科	4年	男	Gサポーター
	スポーツ指導学科	4年	女	Gサポーター
	スポーツビジネス学科	2年	男	Gリーダー
	スポーツビジネス学科	1年	男	
	スポーツビジネス学科	1年	女	
	スポーツビジネス学科	1年	男	
4	スポーツ指導学科	4年	男	Gサポーター
	スポーツ指導学科	4年	女	Gサポーター
	スポーツビジネス学科	2年	男	Gリーダー
	スポーツビジネス学科	1年	男	
	スポーツビジネス学科	1年	男	
	スポーツビジネス学科	1年	女	

## (2) 調査研究スケジュール

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、当初の調査研究スケジュールに即した実施ができず、大幅な計画の変更を余儀なくされた。特に、例年であれば6月～7月に今金町において現状と地域課題の把握のためフィールドワークを実施していたが、今年度は感染拡大の影響により、大学側も学生の学外活動を制限し、さらには今金町も町外からの来訪者を受け入れないといった状況が続いた。このことから感染状況の推移を勘案し、年度後半に集中的に実施することとして再計画を行った。しかし、感染状況は、この計画を実施することもできず、再々計画を行った。

今年度のテーマである小規模集落における高齢者の健康に関わる課題解決方策について、学生がPDCAサイクルを踏まえ展開することを想定していた。しかし、再三にわたる期間の変更により、十分な時間を確保することができないことから、今年度については、高齢者のための「健康増進プロモーションビデオ」という具体策を提示し、学生にはビデオの企画・作成に特化した活動を通して、地域課題に向き合わせることにした。

今金町の現状と地域課題の把握のためフィールドワーについては、前述のように町外からの来訪者を受け入れることのできない状況が続き、断念せざるを得なかった。しかし、学生に今金町の現状と地域課題を理解してもらうために、今金町まちづくり推進課の職員3名が来学する出前型の研修において説明を受けた。さらに、「健康増進プロモーションビデオ」の企画・作成について集中的に協議するために、条件付きで受け入れを行っていた北海道立青少年体験活動支援施設(ネイパル深川)において、宿泊研修を実施した。その後は、学内での準備活動を主として、必要に応じてオンライン(Zoom)による打ち合わせも行った。2月に入ると、グループ毎にシナリオの最終調整と演技練習を行い、2月14日にリハーサルと撮影を行った。

【表2】今年度の調査研究活動

8月31日	研究テーマ、研究内容、研究期間等についての協議（於：今金町）
11月7日～8日	今金町の現状と地域課題の把握（於：大学） 今金町まちづくり推進課参事 寺崎康史 今金町まちづくり推進課地域おこし協力隊 榎原愛歌 今金町まちづくり推進課地域おこし協力隊 角谷侑美香 健康プロモーションビデオの企画（於：ネイパル深川）
11月中旬～1月	学内においてシナリオの検討・台本作成等（於：大学）
2月3日・4日・12日・14日	演技練習・リハーサル及び撮影（於：大学）
3月29日	成果物の贈呈及び披露 合同打ち合せ ※今年度の評価と次年度の取組について（於：今金町）

## II 活動概況

### 1. 今金町を知る／健康増進プロモーションビデオの企画 11月7日(土)～8日(日)

- (1)目的 今金町についての理解を深め、小規模集落の現状について学ぶ。  
小規模集落における健康増進方策として、健康増進プロモーションビデオを企画する。

#### (2)日程

11月7日(土) 【札幌国際大学 211 教室】

9時00分～9時15分

■説明 「本プロジェクトの目的・活動等について」

9時15分～10時15分

■交流レクリエーション

10時15分

■今金町の概要 今金町まちづくり推進課

・地理的環境、自然環境、特産物について

・小規模集落の現状について

11時00分～14時00分

【札幌国際大学 212・213 教室】

■今金町の健康食(いまカレー)の体験調理及び試食

・いまカレーについての説明

・体験調理、試食

13時00分 片付け

14時30分 大学出発

16時00分 ネイパル深川着 【北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル深川】

19時00分～20時30分 研修①

■小規模集落における健康増進方策

・健康増進プロモーションビデオの企画について

11月8日(日)

9時00分～10時00分 研修②

■小規模集落における健康増進方策

・健康増進プロモーションビデオの企画について

10時00分 ネイパル深川出発

11時30分 大学着・解散

### (3)活動概況

#### ■説明「本プロジェクトの目的・活動等について」



#### ■交流レクリエーション



#### ■今金町の概要説明

- ・今金町まちづくり推進課 寺崎参事



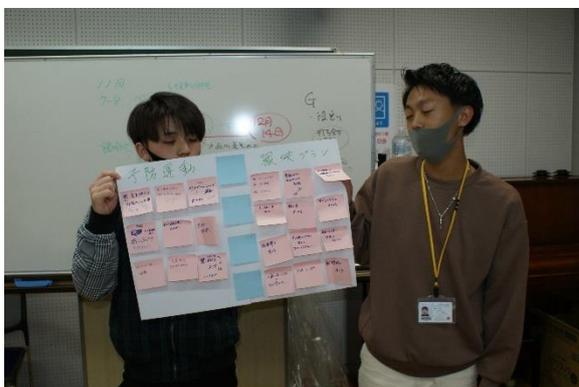
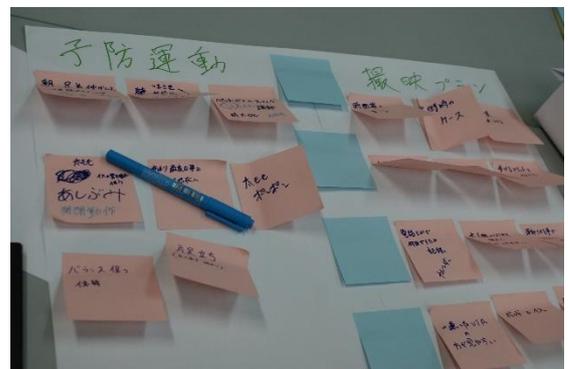
- ・今金町まちづくり推進課 地域おこし協力隊 榎原氏、角谷氏

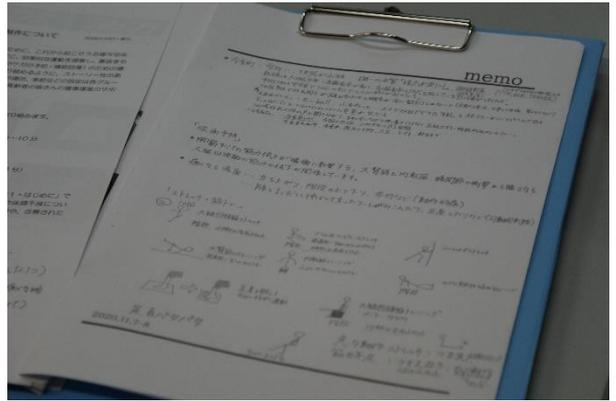


■今金町の健康食（いまカレー）の体験調理及び試食



■小規模集落における健康増進方策 「健康増進プロモーションビデオの企画について」



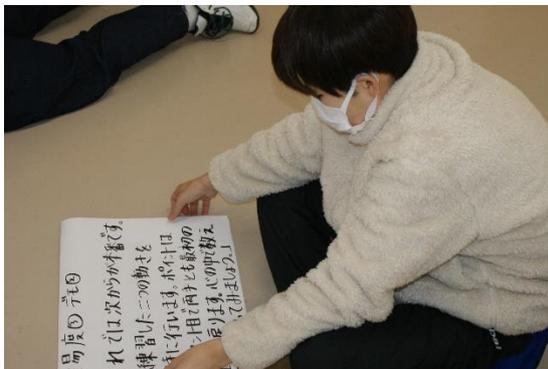


2. シナリオの検討と台本作成・演技練習 令和3年2月3日(水)・4日(木)・12日(金)



### 3. 班ごとに撮影収録

令和3年2月14日(日)



### Ⅲ 調査研究の成果と課題

#### 1 地域課題を通じた課題解決型学習によるリーダー育成について

##### (1) 研究概要の補足

研究概要でも述べたとおり、スポーツビジネス学科の中期目標にあるリーダー育成【70】は、確実に目標達成すべき重要な課題として挙げられている。令和4(2022)年度スタートの新カリキュラムの検討委員会においても、リーダー育成に着目した科目が検討されている。具体的には、従前からの学科カリキュラムの特徴である理論と実践の往還サイクルをより発展させ、実際の地域フィールドにおいてリーダーとしてのスキルの伸長を図るアクティブラーニングによる実践的な科目の新設が検討されている。このように地域に焦点を当てることやリーダー育成に力を入れること、そして体験的な学習を行うことは、高等教育機関も企業も必要性を感じている。

例えば、実際の地域フィールドや実践的な活動については、中央教育審議会(2008)の「学士課程教育の構築に向けて(答申)」なかで、以下のように報告されている。「学生の目的意識を持たせ、学習意欲を喚起する観点から、地域や産業界との連携を深め、(中略)質の高い体験活動の機会を積極的に設けたりするなど、開かれた教育活動を推進することも有意義である。」と報告されている<sup>1)</sup>。

一方で、リーダーとしてのスキルの伸長を図ることについては、経済産業省(2018)の「我が国産業における人材力強化に向けた研究会」において、「時代に応じて自ら随時アップデートして行くことができる人材が求められるようになった。(中略)あらゆる環境下においても、自らの能力を最大限発揮するための社会人基礎力を備える必要性が増大している。」と報告されている<sup>3)</sup>。

そして、中央教育審議会(2018)の「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」では、「いつの時代にも、基礎的で普遍的な知識・理解、汎用的な技能等が中核とされている。(中略)また、学生の自主的活動も含む教育活動全体を通して育成されて行くものである。」と記されており、産業界や地域との協力や連携を重要視している<sup>2)</sup>。つまり、高等教育では、過去から現在、そして未来においても、地域や産業などの社会との関係のなかで、自主的かつ体験的な活動が有意義であることがいえる。

これらのことから、企業側では社会人基礎力を身につけたリーダー要素を兼ね備えた人材に需要があり、高等教育機関では様々な体験的活動を通じた教育活動やリーダー育成が求められていると考えられる。

本学は、平成24(2012)年に今金町と地域連携協定を結び、地域課題の解決と学生の教育を融合した取り組みを行ってきた。実際の地域フィールドを活用することや体験的な活動を取り入れることは従来から実践しており、その効果については、過去の奨励研究<sup>4,5,6,7,8)</sup>で報告済みである。しかしながら、リーダー育成の要素を踏まえた取り組みは過去の報告例にも見られず、新たな教育効果が得られる可能性として非常に魅力的な観点である。

そこで本調査では、今金町が抱える地域課題として、人口減少と高齢化のすすむ小規模集落における高齢者の健康に着目した。高齢者の健康の維持及び介護予防をテーマとした課題解決型学習を設定し、その活動がリーダー育成モデルプログラムに効果的であるか検討することを目的とした。

## (2) 方法の詳細

### ① 調査対象

本調査の対象は、スポーツビジネス学科に所属する 2 年生 4 名であった。4 名は表 1(P2)の通り 4 つのグループに分け、グループを取りまとめるリーダー役として配置した。なお、グループに配置されている 4 年生は、グループ活動の支援ではなく、2 年生のリーダーをサポートするという役割として配置した。

### ② 調査方法

調査方法は、アンケート調査を採用した。アンケート調査は、Office365 の Forms の機能を活用した。Forms で事前に質問項目を作成し、質問シートが掲載された URL を Outlook メールで配信して入力をしてもらい回答を得た。URL でのアンケート調査の配信は、本プロジェクトに参加した全学生を対象としたが、本調査で活用するアンケート調査の回答は、リーダーを担当した 2 年生 4 名の回答とした。

### ③ アンケート調査の詳細

アンケート調査の質問形式は、自由記述形式と 5 段階選択形式の 2 つの方法を採用した。自由記述形式のアンケート調査では、本プロジェクトに対する目標や姿勢、期待、振り返りなど、各個人が取り組む目的や効果を検討する質問項目とした。一方で 5 段階選択形式のアンケート調査では、社会人基礎力を問う 12 個の質問項目とした。

課題解決型学習の効果を検証するため、アンケート調査は、本プロジェクト開始前 1 回、深川グループワーク終了後に 1 回、本プロジェクト終了後に 1 回行い、合計 3 回のアンケート調査を実施した。

1 回目は、2020 年 11 月 6 日に実施し、本プロジェクトに参加するにあたっての目標や期待する点などの質問を設定した。

2 回目は、2020 年 11 月 8 日に実施し、深川グループワークの振り返りについて行った。

3 回目は、2021 年 3 月 21 日に実施した。本プロジェクトで得られた成果や課題などの振り返りに加え、事前アンケートと重複する質問項目も設定した。

なお、アンケート項目については、以下に示す通りである。

#### 【本プロジェクトの事前アンケート項目】

##### [自由記述形式]

Q. 今金プロジェクトへの参加を通して、どのようなことを期待しているか。

Q. 自分自身が成長したいと思う点について

Q. 組織(学科など)のリーダーとしての能力開発、資質向上のために、本プロジェクトに対してどのようなことを期待するか

Q. リーダーシップ力の向上と本プロジェクトについて、どのような関連性があると考えますか

Q. 本プロジェクトでの活動に関して、どのようなことを頑張りたいと考えていますか

Q. 学生リーダーとして、現時点の自分自身を評価してください

##### [5 段階評価形式]

1) 物事に進んで取り組む力

2) 他人に働きかけ巻き込む力

3) 目的を設定し確実に行動する力

- 4) 現状を分析し目的や課題を明らかにする力
- 5) 課題の解決に向けてプロセスを明らかにして準備する力
- 6) 新しい価値を生み出す力
- 7) 自分の意見をわかりやすく伝える力
- 8) 相手の意見を丁寧に聴く力
- 9) 意見の違いや立場の違いを理解する力
- 10) 自分と周知の人々や物事との関係性を理解する力
- 11) ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する力
- 12) 社会のルールや人との約束を守る力

【深川グループワークのアンケート項目】

[自由記述形式]

Q. 今回の活動の振り返りとして、発見したことや気づいたことを記入してください。

【事後アンケート項目】

[5段階評価形式]

- 1) 物事に進んで取り組む力
- 2) 他人に働きかけ巻き込む力
- 3) 目的を設定し確実に行動する力
- 4) 現状を分析し目的や課題を明らかにする力
- 5) 課題の解決に向けてプロセスを明らかにして準備する力
- 6) 新しい価値を生み出す力
- 7) 自分の意見をわかりやすく伝える力
- 8) 相手の意見を丁寧に聴く力
- 9) 意見の違いや立場の違いを理解する力
- 10) 自分と周知の人々や物事との関係性を理解する力
- 11) ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する力
- 12) 社会のルールや人との約束を守る力

(3) 調査結果

① 事前アンケート調査の結果

事前アンケートの自由記述項目に関するリーダー学生の回答結果を表 3 に示した。自由記述項目の回答では、本プロジェクトに参加するにあたっての目標や期待する点などに関する回答が得られた。リーダー学生 4 名の回答にみられた共通点としては、明確に目標設定がされていることであった。各学生の回答は、以下のような特徴がみられた。

学生 A の回答では、「リーダー」や「率先」、「まとめる」の言葉がみられた。自らが率先して動くことやグループをまとめる意識が強く、リーダーとしての成長に目標を設定していることが分かった。一方で、学生 B の回答を見てみると、「サポート」や「状況把握」の言葉が頻繁に活用されていた。グループのリーダ

一として、1年生のサポートや周囲の状況把握をすることが目標として設定していることが分かった。また、学生 D の回答を見てみると、「克服」や「交流」、「円滑」の言葉が活用されていた。学生 D は、人前で話すことが苦手であることを認識しており、自身の苦手分野を理解している。グループ内でのリーダーとしての活動や役割を通じて、自分自身の成長や苦手分野の克服を目標設定していることが分かった。そして、学生 C の回答では、「問題意識」や「適応」、「信頼関係」、「責任感」、「活動の意味」など、多岐にわたる言葉が活用されていた。他の 3 名とは視点が異なり、本プロジェクトに対する姿勢や全体のなかでの役割、グループ内での役割として活動することを目標にしていることが分かった。

本プロジェクトは、地域課題をテーマとした課題解決型学習を通じて教育効果を期待している。リーダー学生 4 名のうち、課題解決型学習を意識しているような回答結果が得られたのは学生 C のみであった。つまり、他 3 名の学生は、事前アンケートの段階では、地域課題を解決するための具体案や成果物などの結果に対する目的意識は低いことが考えられる。しかしながら、4 名のリーダー学生には、それぞれに明確な目標が設定されているという共通点がみられたため、本プロジェクトに対する意欲は高いことが考えられる。それらが目標に設定している内容は異なるものの、グループ内のリーダーとしての役割を通じて得ることを期待していることが考えられる。このことから、1年生のグループに 2 年生をリーダー役として配置することで、各リーダーが考えるグループに必要なリーダーの力を醸成する教育効果が得られる可能性があると考えられる。

【表 3】事前アンケートの自由記述項目に関するリーダー学生の回答結果

質問項目	2年生 リーダー学生			
	学生 A	学生 B	学生 C	学生 D
あなたは、今金プロジェクトへの参加をとおして、どのようなことを期待していますか。	リーダー学生としての初仕事なのでリーダーとして成長出来ればと考えています。	常に周りを見る。一年生が活動しやすいようにサポートを行う。	今金町についての理解を深め、問題の認知をすると同時に、自ら考え改善策の提示をしたい。リーダーとして自分に今後必要な部分を見つけ、レベルアップを図る。	自分に足りない力を見つけ、それを少しでも克服できたらいいなと思っています。
自分自身が成長したいと思う点について、自由に書いてください。	問題を解決する術を瞬時に判断できる力が欲しいです。	周りの状況を把握する力	新しい環境に素早く適応し、行動する力。	自分は人前に立って話すことが、緊張して苦手だと感じているのでそこを直せるようにしていきたい。
組織(学科など)のリーダーとしての能力開発、資質向上のために、本プロジェクトに対してどのようなことを期待するか記入してください。	今回班のリーダーとして動くのでリーダーシップを発揮できるようそしてその力が成長するようになりたいです。	一年生、四年生そして先生方の状況を把握に今自分が何をしないといけないのかを瞬時に判断する力	初対面の人との信頼関係の築き方やコミュニケーションの取り方を学びたい。	一年生は今年、オープンキャンパスなど他のリーダー学生らと関わる機会が少なかったもので、まずは他学年との交流を深めること。また、リーダー学生としての意識の向上がプロジェクトを通して期待されること。2年生は、1年生を引っ張っていく姿を見せながらも、本多ゼミの4年生を見習うこと。
リーダーシップ力の向上と本プロジェクトについて、どのような関連性があると考えますか。	班を自分の判断でまとめ課題解決に勤める点に関係あると考えます。	数少ない学生主体のプロジェクトなため、周りの状況をよく把握し自ら一年生を引っ張っていくことが必要	2年生の各々がグループの長となることで、周囲から見られているという責任感や、学生主体で行動することで自立を促すことができると考えている。	リーダーシップ力を向上させることで、本プロジェクトを全体を通して学生だけでも、よりスムーズに進められ、学生が主体で行動することでどの組織に行ったとしてもリーダーシップ力を発揮できる。
本プロジェクトでの活動に関して、どのようなことを頑張りたいと考えていますか。	自分から率先して動くことを努力したいです。	一年生がいま何を求めているのか、一年生が動きやすいように自分達も行動をする。	各プログラムにおいて、自ら意味を見いだせるようにする。	自分は人前に出て話すことが苦手なので、リーダーを通して物事を円滑に進められたらいいなと思います。

## ② 深川グループワーク後の振り返り

深川グループワークの振り返りアンケート結果の回答を表 4 に示した。リーダー学生 4 名の回答には、2 つの特徴がみられた。

1 つ目は、周囲の環境についてである。学生 A は「初日、進め方がわからず四年生の先輩方に助けら

れてばかりで不甲斐ない結果でした。しかし、その反省を生かし、2 日目の研修でかなり話し合いをスムーズにできたと思います。」と回答しており、学生 C は「初めてのプロジェクト参加で分からない部分がありましたが、二年生との細かい連携や先生方・4 年生のサポートがあったおかげで、無事にプログラムを終えることができた。」と回答している。両者ともに、グループワークをやり遂げた達成感を得ているものの、それはサポート体制の影響を与えていることが考えられる。

2 つ目は、交流の重要性についてである。学生 B は「4 年生が企画をしていただいた交流レクリエーションによって 1 年生と 2 年生の仲、1 年同士の仲が深まったと感じた。(中略)交流レクリエーションがなければ案として持っているが全員に発表できないことが起きたのではないだろうか。」と回答しており、学生 C は「班を結成した当初は班員がどんな人であるのかが分からず、探し探りであった。班員同士の距離感が縮まらない中で、1 日目の 4 年生が企画してくださったアイスブレイクを通じて、班の一体感を感じる事ができた。」と回答している。さらに、学生 D は「もっと身近な話題から仲良くなれたら、距離も縮まって意見も出しやすく、話しやすくなるのかなと思いました。」と回答している。このような回答から、グループ内のリーダーとして、グループワークを進めるうえで交流の重要性を感じていることが分かった。

2 つの特徴的な回答から、グループ内に 4 年生がいることが、2 年生の活動に好影響を与えていることが考えられる。つまり、同じグループ内に経験豊富な上級生を配置することで、リーダーをサポートする環境が充実し、2 年生のリーダー学生は、失敗を恐れることなく、上級生からのアドバイスを参考に活動することができると考えられる。このことから、下級生主体のグループワークに上級生を配置することが、リーダー育成モデルプログラムの効果的な手法の一つであることが考えられる。

【表 4】深川グループワーク後のアンケート調査に関するリーダー学生の回答結果

学生 A	今回、リーダー学生として初めての仕事で、班のリーダーとして話し合いをまとめていかなくては行けない立場だったのですが、初日、進め方がわからず四年生の先輩方に助けられてばかりで不甲斐ない結果でした。しかし、その反省を生かし、2 日目の研修でかなり話し合いをスムーズにできたと思います。そして、普段あまり話さないタイプの子達も積極的に意見を出してくれるようになり本当によかったと思います。
学生 B	今回の活動は、数少ない同学科の 1 年生と他学科の 4 年生とのプロジェクトであったが良いディスカッションやプロジェクト自体の進行を円滑に行えたのではないかと。2 年生が 4 人と 1 番少ない学年であったが、次の進行のためにどういう事に気を付けたら良いか、1 人では気づけない事であっても全員で話し合い気づくことができた。1 年生同士が誰と誰とが仲良いがわからない状態でプロジェクトが始まったが、4 年生が企画をしていただいた交流レクリエーションによって 1 年生と 2 年生の仲、1 年同士の仲が深まったと感じた。1 年生が環境に慣れたこともあり、班ごとのディスカッションでは新たな案と的確な意見が多く出たと感じた。交流レクリエーションがなければ案として持っているが全員に発表できないことが起きたのではないだろうか。
学生 C	初めてのプロジェクト参加で分からない部分がありましたが、二年生との細かい連携や先生方・4 年生のサポートがあったおかげで、無事にプログラムを終えることができた。班を結成した当初は班員がどんな人であるのかが分からず、探し探りであった。班員同士の距離感が縮まらない中で、1 日目の 4 年生が企画してくださったアイスブレイクを通じて、班の一体感を感じる事ができた。4 年生の企画進行が非常にスムーズかつ盛り上げる雰囲気作りから、経験値の差を感じた。1 年生は、前期は対面授業ほとんど無く大学に慣れきれない中で、このプロジェクトに参加してくれた。やはり、最初こそ緊張していたものの、時間が経つにつれて徐々に周囲と溶け込むことができた。環境適応能力が高いように感じた。2 年生は各個人が班長として、活動の先頭をきり、上手く行かないこともあったが横の繋がりで助け合い、協力してプログラム進行に努められたと考える。
学生 D	今回の活動を振り返り、特に 1 年生との交流というのが初めてだったので、とても新鮮な感じでした。また、話し合いの時には特に 1 年生も多く意見を出してくれていたのが頼もしかったです。しっかり 1 年生を信じて、自分も話し合いを進めて行けたらいいかなと思いました。またスポーツをしていたことやスポーツが好きなのは、みんな同じだと思うので、もっと身近な話題から仲良くなれたら、距離も縮まって意見も出しやすく、話しやすくなるのかなと思いました。

### ③ 社会人基礎力の変化

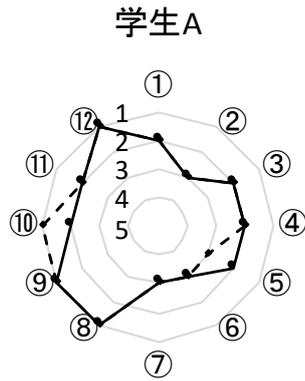
事前および事後アンケートでは、社会人基礎力に関する 12 の質問を設定した。それぞれの項目に関するリーダー学生の 5 段階評価の回答結果を表 4 に示した。リーダー学生 4 名のリーダーチャートを見ると、事前のアンケート結果よりも事後のアンケートの結果のチャートが全体的に大きくなっていることが分かった(図 1~4)。印象分析の結果による考察に留まるものの、本プロジェクトで設定した課題解決型学習は、リーダー育成および社会人基礎力を高める効果があると考えられる。

社会人基礎力の各項目について、リーダー学生 4 名が回答した平均値を比較してみると、②「他人に働きかけ巻き込む力」、④「現状を分析し目的や課題を明らかにする力」、⑤「課題の解決に向けてプロセスを明らかにして準備する力」、⑥「新しい価値を生み出す力」、⑦「自分の意見をわかりやすく伝える力」、⑧「相手の意見を丁寧に聴く力」、⑨「意見の違いや立場の違いを理解する力」の 7 つの項目で事後アンケートの値が向上していることが分かった。特に⑥「新しい価値を生み出す力」が最も向上している項目であった。これについては、本プロジェクトの成果物として「健康増進プロモーションビデオ」を作り上げたことが一つの要因であると考えられる。その他の項目については、少人数且つ、学年が異なるグループでの作業が影響していると考えられる。深川グループワーク後の活動では、4 年生が抜けた状態での活動時間が多く、2 年生 1 人と 1 年生 3 人の計 4 人の活動となった。また、活動内容についても、プロモーションビデオの状況設定や役割分担など、グループでの作業が必然的に生じる形であった。そのため、伝える力や聴く力、準備する力などの項目が向上したと推察される。

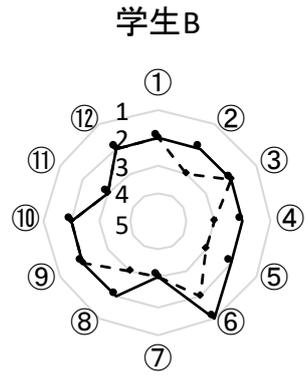
【表 5】事前アンケート 5 段階評価項目 リーダー学生の回答結果

質問項目	2年生 リーダー学生									
	学生 A		学生 B		学生 C		学生 D		平均	
	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post
① 物事に進んで取り組む力	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
② 他人に働きかけ巻き込む力	3	3	3	2	2	2	4	2	3	2.25
③ 目的を設定し確実に行動する力	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
④ 現状を分析し目的や課題を明らかにする力	2	2	3	2	3	2	3	2	2.75	2
⑤ 課題の解決に向けてプロセスを明らかにして準備する力	3	2	3	2	2	2	3	2	2.75	2
⑥ 新しい価値を生み出す力	3	3	2	1	4	3	4	2	3.25	2.25
⑦ 自分の意見をわかりやすく伝える力	3	3	3	3	2	2	4	2	3	2.5
⑧ 相手の意見を丁寧に聴く力	1	1	3	2	2	1	1	1	1.75	1.25
⑨ 意見の違いや立場の違いを理解する力	1	1	2	2	2	1	2	2	1.75	1.5
⑩ 自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	1	2	2	2	2	2	2	2	1.75	2
⑪ ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する力	2	2	3	3	2	2	2	2	2.25	2.25
⑫ 社会のルールや人との約束を守る力	1	1	2	2	1	2	1	1	1.25	1.5

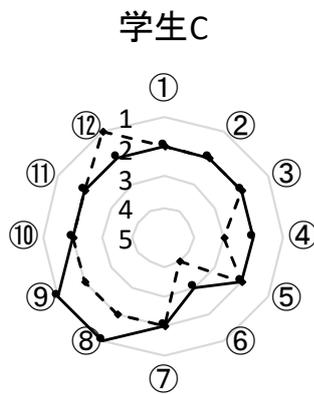
5 全く身についていない  
 4 あまり身についていない  
 3 どちらともいえない  
 2 ある程度身についている  
 1 十分身についている



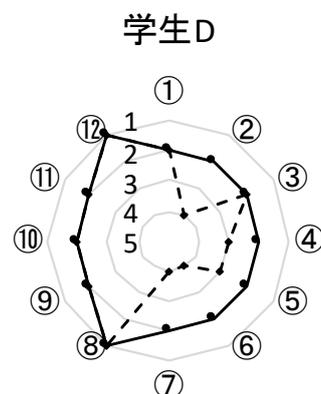
【図1】学生Aの社会人基礎力 Pre/Post



【図2】学生Bの社会人基礎力 Pre/Post



【図3】学生Cの社会人基礎力 Pre/Post



【図4】学生Dの社会人基礎力 Pre/Post

#### ④ まとめと課題

本調査では、今金町が抱える地域課題として、人口減少と高齢化のすすむ小規模集落における高齢者の健康に着目した。高齢者の健康の維持及び介護予防をテーマとした課題解決型学習を設定し、その活動がリーダー育成モデルプログラムに効果的であるか検討することを目的とした。

3つのアンケート結果から、以下のことが分かった。

1. 事前アンケートの段階では、グループ内のリーダーとしての役割を通じて何かを得ることを期待していることが考えられる。
2. 1年生のグループに2年生をリーダー役として配置することで、リーダーの力を醸成する教育効果が得られる可能性があると考えられる。
3. 下級生主体のグループワークに上級生を配置することが、リーダー育成モデルプログラムの効果的な手法の一つであることが考えられる。
4. 課題解決型学習は、リーダー育成および社会人基礎力を高める効果があると考えられる。

本調査結果は、印象分析の結果による考察のため、可能性を感じる程度に留まる。グループワークの人数や学年の組み合わせ、活動内容によって得られる教育効果が異なることが考えられ、要因を断定することは極めて難しい。しかしながら、リーダー養成の観点では、1年生のグループに2年生をリーダー役として配置することは効果的であると考えられる。

## 《参考文献》

- 1) 中央教育審議会(2008). 学士課程教育の構築に向けて(答申)P.15  
[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/icsFiles/afielddfile/2008/12/26/1217067\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/icsFiles/afielddfile/2008/12/26/1217067_001.pdf) . (2021.3.4)
- 2) 経済産業省(2018). 我が国産業における人材力強化に向けた研究会 報告書. P.4  
[https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/pdf/20180319001\\_1.pdf](https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/pdf/20180319001_1.pdf) . (2021.3.4)
- 3) 中央教育審議会(2018). 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)P.3  
[https://www.mext.go.jp/content/1411782\\_003.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1411782_003.pdf) . (2021.3.4)
- 4) 佐久間章・丹治和典(2015). フットパスの可能性に関する研究-今金町を中心に-. 札幌国際大学奨励研究.
- 5) 佐久間章・丹治和典・千葉里美・新井貢・朝地信介(2016). 地域資源を活用したまちづくりに関する研究 -今金町のフットパスの活用方策について-. 札幌国際大学奨励研究.
- 6) 佐久間章・丹治和典・千葉里見・新井貢・本多理紗・坂梨夏代・越田賢一郎(2017). 学科の学びを活用する能動的学習の展開 -今金町美利河地区の地域課題を焦点に-. 札幌国際大学奨励研究.
- 7) 佐久間章・横田久貴・千葉里見・新井貢・本多理紗・坂梨夏代・越田賢一郎(2018). 住民との協働による能動的学習の展開Ⅱ -今金町美利河地区をフィールドとしたプロジェクト学習の推進-. 札幌国際大学奨励研究.
- 8) 佐久間章・坂梨夏代・千葉里見・新井貢・本多理紗(2019). 連携自治体におけるインターンシップの可能性について -課題設定と評価方法を中心に-. 札幌国際大学奨励研究.

## 2 リーダー育成におけるピアサポートの効果

ピアサポートとは、「仲間(ピア)による支援(サポート)」であり、学校におけるピアサポートとは、学生の相互の支援活動全般を示す。スポーツ人間学部では、リーダー学生の存在があり、リーダー学生は、学部の行事や新入生研修、オープンキャンパスなどで多くのサポートを行い活躍しており、リーダーとなる学生の育成には、ピアサポートが大いに関係していると考えられる。

今回の今金町プロジェクトの目的は、①今金町についての理解を深め、小規模集落の現状について学ぶ。②小規模集落における健康増進方策として、健康増進プロモーションビデオを企画することである。②においては、スポーツビジネス学科の1,2年生は、健康増進プロモーションビデオの企画・作成の対象となる高齢者と接した経験が少なく、スポーツ指導学科の4年生は、3年次より多くの活動を経験し、特に高齢者の運動教室や体力測定会等に積極的に参加し、プログラムを企画、運営した経験が豊富である。また、前年度今金町の総合体育館において女性を対象とした運動教室のプログラムの企画、運営を経験したことがあることから、全体を見通しながら、特に2年生のリーダー学生4名へのピアサポートを行った。

### (1) 4年生の具体的なサポートの概要

- \*11月7日、8日に行われる今金プロジェクトに向けて、1年生どうしのコミュニケーション促進と1年生2年生の交流を主とすることを目的とするレクリエーション活動の選定をし、プログラムの運営を行った。
- \*「健康プロモーションビデオ」企画・作成のための4つの班(膝痛予防・転倒予防・腰痛予防・認知症予防)へのサポートを行った。(運動内容、脚本づくりなどのアドバイス)

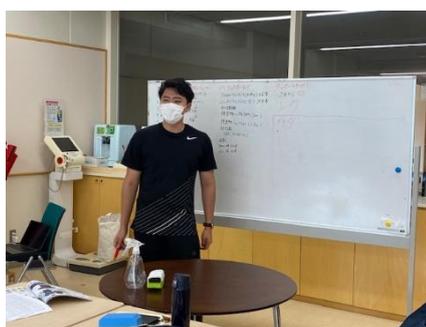
#### ① レクリエーション活動の内容について

【9月23日(水)】

教育実習中の学生が多く、全員で検討することができなかったが、レクリエーションインストラクターやスポーツ・レクリエーション指導者の資格取得見込みの学生を中心にレクリエーション活動を選定した。今年度は、コロナウィルスの影響であまり1年生同士の交流があまりないことが予想されたため、1年生同士の交流ができることを目的として、お互いの緊張をほぐし(アイスブレイキング)、交流が無理なくできる内容のレクリエーション活動の選定を行った。

【表6】レクリエーション活動の内容(1時間程度)(原案)

レクリエーション活動の流れ	導入	交流	発展
内容	他己紹介	人間指すまワードウルフ	震源地ゲーム



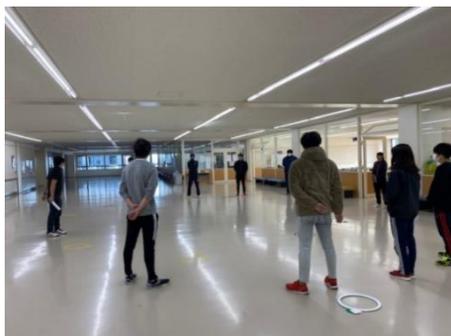
レクリエーション  
活動の選定の様子

【10月28日(水)】

ゼミの3年生に対してレクリエーション活動を実践し、内容の検証を行った。道具等の確認や時間などの細かな調整をし、内容の検討を行い、内容の変更・確認を行い決定した。(表2)

【表7】レクリエーション活動の内容(1時間程度)(決定案)

レクリエーション活動の流れ	導入	交流	発展
内容	1、他己紹介 2、なんでもバスケット	3、震源地ゲーム 4、タイタコゲーム	5、お題ゲーム 6、ボールリレー



【11月4日(水)】

本番前の最終調整により、内容・道具の確認や調整を行い、より良いものにするために本番を想定した練習を行った。



【11月7日(日)~8日(月)】

\*11月7日(日)交流レクリエーション



他己紹介



何でもバスケット



震源地ゲーム



タイタコゲーム



お題ゲーム



ボールリレー

\*11月8日(日)「健康プロモーションビデオ」企画・作成のためのグループでの話し合い



膝痛予防グループ



転倒予防グループ



腰痛予防グループ



認知症予防グループ

## (2) 2年生リーダー学生のピアサポーターとしての4年生の役割について

### ① 交流レクリエーションについて

事後アンケートにも書かれていたように、4年生が企画をしたレクリエーション活動によって1,2年生の交流、1年生同士の交流を通して仲を深めることができ、班の一体感を感じることができたようである。このレクリエーション活動の目的は大いに達成されていた。また、「4年生の企画進行が非常にスムーズかつ盛り上げる雰囲気づくりから、経験の差を感じた」とあるように経験のある4年生がお手本となり、プログラムを運営することにより、2年生のリーダー学生の今後の活動へ向けての意欲が刺激されていたように考える。

### ② 「健康プロモーションビデオ」企画・作成のためのグループでの活動について

2年生のリーダー学生は、1日目の話し合いにおいては、「進め方がわからず4年生の先輩方に助けられてばかりで不甲斐ない結果でした」「物事の進め方の自信がなくなり上手く話せなかったり、進行具合も他の班と比べると遅れているといったところから、焦りも感じていました。」などのネガティブな反省もあったが、4年生からの具体的なアドバイスを受け、自分自身の課題を理解し、次の活動では何をすべきかを自ら考え、行動するようになってきた。2日目の話し合いでは、「かなり話し合いをスムーズにできた」「普段あまり話さない1年生も積極的に意見を出してくれるようになり本当によかった」などポジティブな意見が出るようになっていた。そして、「4年生の進行のスムーズさと頼りやすさ、周りを見る力の差を感じた。」「4年生の良いところが多く見習える良い機会であった」などの意見があるようにリーダーとして自身が置かれている立場と比較をし、4年生の良いところを見習い「1年生にどのような言い方をしたら伝わるかを意識して行動した」「他責ではなく自責の意識を強く持って行動していきたい」「自分のことだけではなく、周りの状況把握もしっかりしないといけない」などのリーダーとしての自覚が生まれていたように考える。

また、4年生は、今までは積極的にリーダーシップをとり、主体的に行動や発言をし、グループを引っ張る役をしてきたが、サポートという立場に変わったことで、どの程度までのアドバイスをしたらよいか、会話に介入すべきか等の葛藤と難しさがあったようであり、2年生のリーダー学生がリーダーとしての役割を果たすためにどうサポートすべきかを考え、行動をし、4年生にとっても良き経験と学びになったと考える。

今回は、スポーツ指導学の4年生ということもあり、教育実習や資格の試験、コロナウィルス感染症の影響等があり、全員が集まることがあまりできず、打ち合わせ等も満足にできなかった。特に11月以降も教育実習の延長や就職先への訪問などが重なり、Zoomでの話し合い等には参加できなかったものの動画の撮影のリハーサル、撮影本番、その他の話し合い等に参加できず、継続的なサポートを最後まですることができなかった。しかし、11月7日、8日に行われた今金プロジェクトの導入部分で4年生の姿を見せることで、2年生は、自らの課題を見つけ、責任を持ち行動をし、リーダー学生としての自覚が生まれ1年生のサポートができたと考えられる。1年生はその2年生の姿をお手本とし、自分自身も2年生のようになりたいという意識が芽生えたように考える。また、4年生においてもサポートをする役割の中で、もっと質の良いサポートをするためにはどうすべきかを考え、成長したと感じているようであった。

今回は、4年生と1,2年生が対象であり、しかも他学科のピアサポートであったが、同学科、そして1

年生は2年生、2年生は3年生といった近い学年でのピアサポートを行うとことで、さらに下級生は身近な存在と感ずることができるとはなから考へる。このように、リーダーの育成には、ピアサポートが有効であり、今後大いに活躍できるリーダーを育成することで、大学生生活の質の向上にもつながることと考へる。

《 参考文献 》

- ・大石由起子「高等教育におけるピアサポート導入の教育的効果と期待」『大学と学生』561:16—21.
- ・大石由起子 林典子 稲永努  
「大学における新入生支援としてのピアサポート活動—立ち上げの2年間をめぐる考察—」  
山口県立大学学術情報 第3号(社会福祉学部紀要) PP29-44 2010
- ・中出佳操「大学生によるピア・サポート活動とその意義」人間福祉研究 6巻 85-99 2003
- ・泉谷道子 山田剛史「体系的なピア・サポート活動による学生の学びと成長」大学教育実践ジャーナル 第11号:61-67

### 3 今金プロジェクトとカリキュラムへの導入

スポーツビジネス学科では、令和 4 年(2022)年度より新カリキュラムへ移行する。新カリキュラムでは、スポーツビジネス学科カリキュラムの特徴である理論と実践の往還サイクルをより発展させ、実際の地域フィールドにおいてリーダーとしてのスキルの伸長を図るアクティブラーニングによる実践的な科目の新設を計画している。

本章では、今金プロジェクト(リーダー育成プログラム)の新たなカリキュラムへの導入について、カリキュラムへの位置づけ、学科ディプロマポリシーとの関連および期待される効果を述べていく。

#### (1) スポーツビジネス学科の育てる人材像

カリキュラム改定にあたり、スポーツビジネス学科のカリキュラム委員会は学科の理念及びビジョンを明確にしている。その中で、学科の育てる人材像には「スポーツと共にいきる人材」、「自ら考え実践できる人材」と「北海道をつなぐ人材」が設定され、ビジョンとして「進学したい学科から卒業後に誇れる学科へ」が掲げられている。

今金プロジェクトでは、本学と多彩な連携事業を展開してきた実績のある今金町をフィールドとして、地域課題の解決のために情報収集、課題設定、企画立案、実施、評価の一連の過程を通して、地域資源の活用や魅力を発信する方策を提案することを目的としている。すなわち、学科の育てる人材像のひとつである「北海道をつなぐ人材」を達成する上でも、本プロジェクトは有効な働きをもたらすことが考えられる。実際に、フィールドワークを経験した学生は、以下の通り述べており、本プロジェクトのような活動を通して、学生と北海道の地域を繋ぐことが可能となり、新たな知識を得るだけでなく地域の課題をどのように改善することができるかを考える有意義な機会となるであろう。

「今回の活動を振り返り発見したことは今金の高齢者問題、そして今金の特産品で作った料理が美味しかったことです。また高齢者に特に多い身体の不調に対してどのような予防ができるか、予防のために高齢者が楽しく、続けられるストレッチやトレーニングを考えることが思ったより難しいこと、それをわかりやすく伝えることや、ストレッチやトレーニングについて自信を持っておすすめするにはたくさんの準備と労力が必要だということに気づけました。(1年・女)」 (原文そのまま)

「今金町の現状を知ることができてよかったと感じてる。その理由は、なかなか高齢者の割合が多い地域についてよく知らなかったり、行ったことがなかったりと知識がなく話を聞くと地域をどうにか活性化させることができないのだろうかと考えられるようになれば、今金町のいいところも知ることができてとても嬉しく感じた。(1年・男)」 (原文そのまま)

## (2) 学科ディプロマポリシーとの関連

次に、スポーツビジネス学科のディプロマポリシー(以下 DP とする)と今金プロジェクトとの関連について述べていく。カリキュラム改定にあたり、カリキュラム委員会はスポーツビジネス学科の DP を以下のとおり修正している。

DP:

スポーツビジネス学科ではスポーツを通して、社会で活躍するための知識を修得し、ビジネスの感覚を身につけ現場で活躍できる人材を育成することを目的とする。所定の期間在学し、学部・学科の教育理念、教育目標に沿って設定した授業科目を履修して、所定の単位数を修得し卒業までに下記に示す姿勢や能力を身に付けた学生に卒業を認定し、学位規則に従い学士の学位を授与する。3つの DP の構成要素および定義は以下のとおりである。

【表 8】 スポーツビジネス学科 ディプロマポリシーと 12 のチカラ

ディプロマポリシー		構成要素		定義
1	スポーツ健康分野、スポーツビジネス分野についての知識・見識	1.1	情報収集力	スポーツ・スポーツビジネス分野に関する情報をインプットする力
		1.2	情報処理力	収集した情報を整理し、アウトプットする力
		1.3	判断力	状況を読み解き、正しく判断する力
2	諸課題への対応能力と実践力	2.1	情報把握力	自分の置かれている状態や周囲との関係性を理解する力
		2.2	分析力	ある事柄を要素や成分に分けて、その構成を明らかにする力
		2.3	課題発見力	現状を分析し、目的や課題を明らかにする力
		2.4	企画立案力	課題解決のための計画を立て、実行する力
3	自立して行動できる姿勢とコミュニケーション能力	3.1	協働する力	メンバーと強調しながら目標に向かって行動する力
		3.2	伝える力	自分の意見をわかりやすく伝える力
		3.3	主体性・行動力	物事に進んで取り組む力
		3.4	規律性	社会のルールやコンプライアンスに基づいて行動する力
		3.5	関係構築力	様々な他者と円滑な関係を築く力

スポーツビジネス学科では、DP の構成要素として「12のチカラ」を新たに設定している。これらは社会人基礎力と札幌国際大学の教育スタイルを反映しており、それぞれの構成要素を設けることで学生の伸びしろ(成長率)を数値できることが期待できる。

今金プロジェクトではこれら12のチカラについて、プロジェクトの前(pre)と後(post)に参加学生を対象として予備調査を実施した。調査はそれぞれの質問項目について、5(十分身についている)から1(全く身についていない)の5件法にて回答を求めた。なお、調査結果を以下に示す。

【表 9】 今金プロジェクトが学科 DP・12のチカラに及ぼす影響

1 2のチカラ	pre	post	difference(mean)
①-1 情報収集力	3.6	3.8	0.2
①-2 情報処理力	3.4	3.5	0.1
①-3 判断力	3.9	3.8	-0.1
②-1 情報把握力	4.0	4.1	0.1
②-2 分析力	3.3	3.4	0.1
②-3 課題発見力	3.5	3.7	0.2
②-4 企画立案力	3.3	3.7	0.4
③-1 協働する力	4.3	4.1	-0.2
③-2 伝える力	3.2	3.8	0.6
③-3 主体性・行動力	3.6	3.9	0.3
③-4 規律性	4.4	4.5	0.1
③-5 関係構築力	3.8	4.1	0.3
	n=10	n=10	

この調査結果は、回答した学生数も十分でないことから結果の解釈には十分な注意を要し、結果は参考程度のものであつて扱ふ必要がある。しかしながら、判断力と協働する力以外の項目についてはわずかながらも増加しており、今金プロジェクトがスポーツビジネス学科 DP の12のチカラに一定の効果を与えることが考えられる。例えば、最も変化したといえる「伝える力」についてプロジェクトに参加した学生は、以下の通り述べている。今後の課題としては、調査の対象者数を増やし、質問項目の吟味や信頼性の確認を行うことで、今金プロジェクトが12のチカラに及ぼす影響を調査する必要がある。

「自分自身の課題として、話しが簡潔に伝えることができなかつたり周りを見ることが足りなかつたりということを感じていたが今回は意識したこともありこの2点については成長できたのではないだろうか。更に、継続して全員に均等に話を振り全員でディスカッションができた。そのようなこともあり今回は、話を周りに振ることを意識しすぎてしまい自分の意見を他のディスカッションに比べ少なかつたと感じる。今後は、話を周りに振りながら自分の意見もしっかり出して行きたい。(2年・男)」(原文そのまま)

### (3) カリキュラムへの位置づけ

最後に、今金プロジェクトの新カリキュラムへの位置づけについて考察する。下記の表は現段階でのスポーツビジネス学科の新カリキュラム・学科専門科目案(2021年3月現在)である。

【表 10】 スポーツ人間学部スポーツビジネス学科 学科科目 2022(令和4)年度入学生

授業科目		単位数		授業方法	開講年次	開講期	
		必修	選択				
18科目							
学科専門科目	スポーツビジネス分野						
	北海道とスポーツⅠ	新設	2		講義	1	前期
	北海道とスポーツⅡ	新設	2		講義	1	後期
	スポーツビジネス論Ⅰ	名称変更	2		講義	1	後期
	スポーツビジネス論Ⅱ	名称変更	2		講義	2	前期
	スポーツマーケティング	名称変更		2	講義	2	前期
	スポーツコマース	名称変更		2	講義	2	後期
	プロスポーツ経営論			2	講義	3	前期
	スポーツ情報戦略Ⅰ	新設		2	講義	3	前期
	スポーツ情報戦略Ⅱ	新設		2	演習	3	後期
	スポーツビジネス演習Ⅰ	新設		2	演習	2	後期
	スポーツビジネス演習Ⅱ	新設		2	演習	3	後期
	健康運動論			2	講義	2	後期
	健康産業論			2	講義	3	前期
	フィットネス演習			2	演習	3	後期
	スポーツツーリズム	新設		2	講義	4	前期
	ヘルスプロモーション	名称変更		2	演習	4	前期
	スポーツフィールドワークⅠ	名称変更		2	演習	1	前期
スポーツフィールドワークⅡ	新設		2	演習	2	前期	

今金プロジェクトのようなリーダー育成プログラムをカリキュラムに導入する際に、重要となるのがカリキュラム内の位置づけである。上記の学科専門科目内で授業導入への可能性が挙げられるのは「スポーツフィールドワークⅠ」と「スポーツビジネス演習Ⅰ・Ⅱ」である。スポーツフィールドワークⅠは道内で実施予定の集中授業のため、今回実施したプロジェクトを組み込むことが可能である。また、新設が予定されているスポーツビジネス演習Ⅰとスポーツビジネス演習Ⅱは2・3年生が合同で行う授業であり、前半を講義形式、後半を課題活動といった方で健康産業ビジネスに関するフィールドワークを行うことが可能であろう。また、スポーツビジネス学科の専門科目だけでなく、学部共通科目として新設される「リーダー演習」も授業導入の候補として挙げられる。今後の課題としては、実施フィールドに求められる視点や要素の明確化および効果的な学年配当と期別配当等について議論を進める必要がある。

## IV コロナ禍における教育研究活動の実際について

——表現教育(演劇・舞踊)を用いた「高齢者(過疎集落・独居)のための健康増進プロモーションビデオ(DVD)」制作の取り組み

2020年3月、WHOはコロナウイルス感染拡大によるパンデミック(感染症・伝染病の世界的な流行)を宣言し、同時に全国の小学校、中学校、高等学校はすべて臨時休校(大学は春季休業期間中)となった。日本政府は全都道府県を対象に「緊急事態宣言」を発令し、文部科学省は全国の高等教育機関へ対し、新学期を迎える大学の円滑な再開に向けて、「今後、地域において、感染源(リンク)が分からない患者数が継続的に増加し、こうした地域が全国に拡大すれば、どこかの地域を発端として、爆発的な感染拡大を伴う大規模流行につながりかねない」との分析から、地域ごとの状況に応じた、一人ひとりの「行動変容」や「強い行動自粛の呼びかけ」が重要であるという認識を示した。このような認識を前提として、各学校においては、各地域の感染状況を十分踏まえながら、春季休業期間中はもとより、新学期以降も、引き続き十分な警戒を行い、感染症対策に万全を期す具体的な方針をできる限り早急にとりまとめ、教育研究活動へ向け準備をするようにと通達した。

### 1. 大学等における感染拡大の防止について

大学等では、日常において、3つの条件(換気の悪い密閉空間、多くの人が密集、近距離での会話や発話)が重なることを徹底的に回避する対策が不可欠であること。大学等における授業等の開始に当たっては、万全の感染症対策を講じ、衛生環境の整備に特に御留意した上で、その準備を進めること。また、入学式等の年度初頭の行事の実施に際しては、地域の実態を踏まえ、上記の3つの条件が重なることのないよう、それぞれの学校行事の態様の特徴に応じて、感染拡大防止の措置や開催方式の工夫等の措置を講じ、延期する等の対応を適切に行うこと。なお、地域における感染症の発生状況や学生の状況等を踏まえ、当初の予定通りに授業等を開始することが困難である場合には、設置者の判断で授業等の開始時期の延期等を行うことを妨げるものではないが、その検討を行う場合は、多様なメディアを高度に利用して行う授業(以下「遠隔授業」という)の活用などによる学修機会の確保に留意すること。なお、今後、日本のどこかの地域で「オーバーシュート」(爆発的的患者急増)が生じた場合には、専門家会議見解に基づき対応すること。日々の学校現場における「3つの条件が同時に重なる場」を避けるため、①換気の悪い密閉空間にしないための換気の徹底をする、②多くの人が手の届く距離に集まらないための配慮をする、③近距離での会話や大声での発声をできるだけ控える、を元に保健管理や環境衛生を良好に保つような取組を進めていくとともに、咳エチケットや手洗いなどの基本的な感染症対策を徹底することが重要である。感染状況が確認されていない地域では、学校における様々な活動や、屋外でのスポーツやスポーツ観戦、文化・芸術施設の利用などを、適切にそれらのリスクを判断した上で、感染拡大のリスクの低い活動から実施すること。ただし、急激な感染拡大への備えと、「3つの条件が同時に重なる場」を徹底的に回避する対策は不可欠である。 ※文部科学省新型コロナウイルスに関連した感染症対策について(大学・大学院・高専)元文科高第1259号

上記の内容を元に、本学では新型コロナ感染症対策本部が組織され、万全なコロナ対策を迅速に進めることとなった。日々、感染者や死者数が増大してゆくコロナ禍の下、先々のことは予測がつかない非常事態の中で、スポーツ人間学部スポーツビジネス学科の教員6名と、1・2年生の学生16名、そして前回のプ

プロジェクトやゼミ活動で経験値のある本多ゼミナール生(同学部スポーツ指導学科の4年生)7名が立ち上げの際にピアサポートメンバーとして加わり、今回の「今金プロジェクト2020」プロジェクトチームが結成され、そのチームによる教育研究活動が始動した。

本研究「今金プロジェクト2020(地域課題に奨励焦点を当てたリーダー育成に関する実証的研究～リーダー育成モデルプログラムの検討～)」のテーマは、過疎集落に住む独居高齢者へ向けた健康増進のためのプログラムの開発であり、コロナ禍の状況を踏まえて、高齢・過疎集落における健康増進方策として、「健康増進プロモーションビデオ(DVD)」の制作に取り組むことになった。コロナ禍の下、これから起こり得る事態と、それに伴い日々変容してゆく様々な規制や注意すべき事項などが加わってくる中で、上記で述べた日々の学校現場における3つの条件が同時に重なる場を避け、死に至らしめる高齢者や基礎疾患患者への感染対策も考慮し、かつ、それらの規制の中でも学生の学修機会の確保をすること、そして何よりもこれらの要素が同時に成立することが重要であると考えた。

そのような観点に立って、オンラインをフルに活用しながら実践可能な活動を模索した結果、表現教育(演劇・舞踊)の手法を採用して、その利点を取り入れ「高齢者(過疎集落・独居)のための健康増進プロモーション映像(DVD)」の制作を企画し運営することに至った。以下、それらの実践を行い、コロナ禍の状況下における学生それぞれのスキルの醸成を目指した研究過程と成果について報告する。

## 2. コロナ禍における本学の現状と対応

2020年度年明け早々、全世界中を襲った新型コロナウイルス感染症の蔓延は、世界規模で未曾有の被害は健康ばかりか経済にまで甚大な被害と影響を及ぼした。特に、高齢者や基礎疾患保持者の感染リスクは高く、尊い命をあっという間に奪い去る新型コロナウイルスの猛威の前に、緊急事態宣言の下、不急不要の外出の制限を始め、様々な規制・自粛がなされ、それによって我々の日常生活様式も一変することとなった。日常生活においても感染拡大防止のため、マスク着用、手指の消毒、不急不要の外出の自粛、ソーシャルディスタンスの確保が求められ、また社会的にも、クラスターを避けるため飲食店や商店街の閉鎖、人の集まる演劇、音楽、ダンスなどコンサートや公演などその他のイベントのすべては中止となり、外食や観光などに至る数えきれない産業が停止し、その結果、経済は立ち行かなくなった。世界各国でも一日の死者数、感染者数は日に増え、クローズドな環境の島国であり、かつ文化的に清潔好きとされるわれわれ日本人とは違い、多くの国では国境を閉鎖し、社会生活をロックダウンするといった感染防止策を取るなど、世界中、コロナ禍で大混乱に陥った。特に、高齢者や基礎疾患を持つ人の尊い命は奪われ、感染による重症化が相次ぎ医療崩壊も起こり、いつ感染するかわからない「健康」と「死」が紙一重という緊張感を孕んで、人々は心のよりどころを失いかけながら「新しい生活様式」に何とか順応していくというありさまであった。

本学においても卒業式や入学式は中止となり、今年度入学した1年生は一度も本学へ足を踏み入れることのないまま新年度がスタートし、授業はおろかサークル活動も含めたいわゆるキャンパスライフを肌で感じることもなく、何よりもわれわれ教員が彼らと対面で顔を合わせてのコミュニケーションを取る機会はほとんどなかった。また、授業はリモートによる遠隔授業が導入されたが、初めてのオンラインでの授業に教員も学生も戸惑いは大きく、さらに途中からは遠隔と対面を組み合わせたハイブリット授業への展開も要求され、これは特に実技系の講義における集団のチームプレイや、広いフィールドで競技するスポーツ科目な

どは授業計画の変更から余儀なくされた。その他、カリキュラムに予定されていたフィールドワークや実習、さらには学園祭、スポーツフェスティバルなど大学ならではの楽しいイベントなどもすべて中止となり、いずれにせよ、教える方も学ぶ方も手探りで互いに協力し合いながら一つ一つ乗り切る、という状態で正直、相互の疲弊は免れなかった。

このような特異な状況下、日々の感染状況を考慮しながら限られた時間と規制の中で、参加学生の学修意欲を失わずに効率良く課題に向かわせ、さらに学生の安全も確保したうえで安心して取り組める環境の整備を図りながら、短期間で集中して学びを積み上げてゆけるようにと、演劇教育を取り入れた活動を実施することとなった。

### 3. 「健康増進プロモーションビデオ」の制作と演劇教育のメリットについて

社会構造の変化や価値観が多様化する中、個々の生身の人間が持つ自己表現やコミュニケーション能力の向上はさらに求められている。海外では「演劇教育」を通してコミュニケーション手段の獲得と形成、アイデンティティの形成、先を見通す想像力、さらに独自の創造力を高め、様々な非認知能力を育てるコンテンツとして、初等中等教育はもとより高等教育においても正課の科目となっているが、日本の演劇教育はいずれの段階も正課の科目に位置付けられていないため、課外活動のクラブや部活動、小学校の学習発表会で単発に細々と取り組む程度なので、学生たちもせいぜいセリフを一つ二つ話した経験があるぐらいの初心者たちである。今回のコロナ禍でコミュニケーションの場を奪われた学生が、このコミュニケーション力を向上させ、リーダーとして他者を説得させ、特に話す力や言葉で気持ちを相手に伝える力を延伸させるために、そして何よりも未だ大学という場所で顔をあわせてつきあう機会も持てないままの1年生と2年生を繋ぐうえでも、この演劇というコンテンツは有効と考えた。

働きかける対象としての高齢者が映像を見て、楽しそう、やってみようと思って取り組んでもらうための導入部のプロローグとして、運動を始めるきっかけとなるちょっとした芝居を学生が演じ、続いて実際の運動を紹介するという構成で展開することを提案した。この提案のもう一つのねらいは、高齢者の感染予防対策である。高齢者向け施設、介護老人保険施設やグループホームなどでは家族との面会が禁止となり、心のよりどころを無くして認知症が進み、歩行困難になるといった事例が相次いで報告されたことも踏まえ、一方的に運動を奨励する構成でコンテンツを展開するのではなく、人との関わりが健康を保つ上でいかに大切であるか、という見地から、とりわけ隣人との交流がままならない過疎地での独居、一人暮らしの高齢者へ、こちらから語りかける芝居仕立てのアプローチが有効ではないかと考えた。

まず、下ごしらえとして、あらかじめ今金町まちづくり推進課地域おこし協力隊の榊原愛歌さん、角谷侑美香さん(共に札幌国際大学人文学部現代文化学科卒業生)に、今金町の概況と現状についてブリーフィングをお願いした。人口減少や高齢化など進行が著しい地域において、地域以外の人材を積極的に受け入れ、地域協力活動を行い、その定住・定着を図り、地域力の維持・強化を図っていくことを目的とした国の制度である地域おこし協力隊として活動してきた経験から、現在の今金町の人口は2,452人(令和2年7月末現在)で、令和27年に人口の減少は50%を超える可能性があること、今金町の65歳以上の高齢者は176人で、集落である美利河地区、花石地区、中里地区、住吉区の4つの集落に住む高齢者は103人を占め、67世帯中一人世帯は26世帯であることなど具体的な状況を教えてもらった結果、改めて「過疎集落在住の独居高齢者への健康寿命延伸」という課題が今金町という地域にとって差し迫った大きな課

題であることを再認識した。このブリーフィングにより共通認識を新たにし学生たちは、課題である「健康増進プロモーションビデオ」の作成へ取り組む意義を見出し、作業に取り掛かった。

まず、限られた時間の中で有意義な議論を重ねられるように、「転倒予防」「ひざ痛予防」「腰痛予防」「認知症予防」と4つのテーマをもとに4グループ(4名)に学生を分け、1グループずつソーシャルディスタンスを図りながらグループワークを進めた。ひとつのテーマについて上演時間を8分から10分以内を目途に、それぞれのテーマに沿った必要な運動の選定、芝居のシチュエーションや登場人物など討議を重ね、おおまかな台本の構成を済ませてから、それ以後は各グループのリーダーとなった学生が中心となり学生同士で、オンラインでのやり取りも含めて何度も作業を積み上げ、構成を練りあげた。学生たちはこちらが想像していた以上にスムーズにまとめ上げ、その間の手直しや添削もさほど時間を要することなく、各グループとも台本完成の締め切りをしっかりと守ることができ、彼ら学生の責任感と意識の高さには感心した。

オンラインによるコミュニケーション不足や、対人関係が上手く行かず途中で意欲を喪失しドロップアウトする場合、あるいは感染拡大、濃厚接触者となって活動が止まる、など、事前の懸念は多々あったが、そもそも演劇という表現は仮に演出、キャスト、スタッフが揃わず、一人になってしまった場合でも、演じ手の交代や、ナレーションや音響効果で繋ぐなど演出方法でいかようにでも工夫して創ることができるもので、そのような融通無碍なフレキシビリティも演劇表現の良さの一つである。

全グループによるオンライン上での初読み合わせは、互いの台本の内容や構成を比較・対比し、自分たちの台本や演出をさらに良いものへと深めるきっかけとなった。冬休み明け、コロナ禍は再び厳しい状況となり、演技する空間を選んだり、お互いの衣裳を持ち寄ることもできなくなったので、全部のグループが同じ場所にセットを組み、テーマごとに小道具に変化をつけ、また映像の構図をかえるなどして、それぞれのテーマとシチュエーションに沿うように何とか工夫しながら、全てのテーマを一日で一気に撮影することになった。その間、学生たちは待ち時間を、打ち合わせや読み合わせ、細かな確認をし、それぞれが有効に工夫して使っていたようで、こちらの指示を待つのではなく臨機応変に対応する力や、刻々と変化する状況を読んで先を見通す力などを身に付けて行った。

「模倣は人類の持っている本能である」という言葉通り、自分以外の他者を演じ、相手とのセリフのやり取りや、日常では使わない表現や言葉遣いを呼応させてゆくうちに、最初の緊張も解け、学生たちは自分たちの創作したオリジナル台本が息づいてくる過程の中で、何度もテイクを出しながらも演じることに喜びを見出したようで、そのような過程で表現することの楽しさに気づいたのであろう、撮影終了後もみんな達成感に溢れていた。そのため、完成したDVDは生き生きと爽やかに演じている彼らの姿が好印象で、予想以上の健康増進プロモーションビデオとなったと思う。

#### 4. 「I・MA・KA・NE～スマイルダンス」の健康増進について

ダンスには心や体を同時にリラックスさせ癒す効果がある。言葉を用いず、踊ることで言葉を介在せずに他者と楽しさなどの気持ちを共感することができるノンバーバルなコミュニケーションツールである。また、音楽を聴きながらの適度な有酸素運動は、自分の身体能力に合わせて無理をすることなく歌いながら体を動かすことで、自然と、鼻から息を吸って、口から息を吐くという呼吸法となるので、交感神経と副交感神経のバランスが整い自律神経の安定につながりストレスを解消してくれる。リズムに乗って楽しく、特に上半身の腕と手指の運動を心臓より高い位置で動かし、心臓に血液を戻す振付は手指の浮腫みを取り、肩

こりにも効果的である。立ったまま、椅子に座って、ベッドに仰向けに寝たまま、小さな空間で踊ることができる。ジャンケンのグウやペアをモチーフに、肘を伸ばしても曲げたままでも、左右どちらからでも、カウントではなくオノマトペやイメージの言葉で踊れるように、1番から3番まで振付は変えずに繰り返して踊る。このダンス(3分間)を3回繰り返すと、約10分間のエクササイズになる。10分間を黙々と運動するのは単調で続かないものだが、歌詞に思いを馳せることであっという間に時間が過ぎ、また踊りたくなる元気がわき上がる楽曲と振付になった。水を入れたペットボトルや身近にあるモノを持って踊ると負荷を与えさらに筋肉トレーニングに効果があがる。何より、音楽自体が今金町をイメージした歌詞になっているので、高齢者から幼児まで幅広いジェネレーションの方々と一緒に楽しみながら健康増進に役立てられるよう、ダンスセラピストの立場からも指示し、最終的な完成形を作り上げることに配慮した。

学生たちが自分たちで工夫して作った芝居や運動エクササイズ、プロのミュージシャンの島みやえい子さんの洗練された音楽、さらに映像編集も専門家の手を借りたもので、アマチュアの熱と工夫に、専門家の技術や知識がとてもしっかり具合にコラボレーションできた映像コンテンツになったのではないかと自負している。今金町のお年寄りたちの健康増進に役立つことを願ってこのような作業をしたものの、これは誰でも何度か繰り返して見るたびに、自然と体が動き出したいくなるような仕上がりになっている。次年度はこの「I・MA・KA・NE～スマイルダンス」を使って、今金町の地域の人たちの健康増進と共に、地元今金町のPRにも役立ててもらえる観光面での寄与なども視野に入れた活動実践へつなげてゆければ、と思っている。



<p>■ 企画 ■ 今金プロジェクト2020 (札幌国際大学奨励研究)</p> <p>■ 振付 ■ 赤川智保 (スポーツビジネス学科・ ダンスセラピスト)</p> <p>■ 歌唱 ■ 島みやえい子 札幌市在住。 札幌を拠点に、学生時代から CMソングなどの制作、 ヴォーカルを手がける。 1999年～2011年までIveの ボーカリストの1人として、 数々の楽曲を担当。 2006年「O(オー)」で メジャーデビュー。アニメ 「ひぐらしのなく頃に」の シリーズでは主題歌を担当。 ヴォーカル講師、 シンガーソングライターと して現在も活動中。</p> <p>■ 編曲 ■ SHINKAI 札幌で結成されたメロ ディックデスメタルバンド 「GYZE(ギゼ)」の ギターとミュージック シーケンサーを担当。 作曲・DTM講師。</p>	<p>I・MA・KA・NE 作詞・作曲 島みやえい子 編曲 SHINKAI</p> <p>1 I・MA・KA・NE I・MA・KA・NE ホクホク今金だんしゃく ミニマト 今金米 黒毛和牛 今金大豆 軟白長ネギ Oh yeah 大好き大好き今金町 日本一 いや世界一 大きな声で笑いましょ わっはっはっはっはっはっはっは!</p> <p>2 てくてこの町歩けば 歌っているよ チューリップ ちよっと休みしモジューズ 温泉浴かかって ハア～Paradise 大好き大好き今金町 じーちゃんばーちゃん ヤングマン いまるも一緒に 笑いましょ わっはっはっはっはっはっはっは!</p> <p>3 春らんまん 花ざかり 夏きれいな水遊び 秋はおいしいきりぎりす 冬ゆきあかり So Sweet♡ 大好き大好き今金町 手と手つないでつながって 大きな輪になって笑いましょ わっはっはっはっはっはっはっは!</p> <p>(1番サビ繰り返し)</p>
---	---

## V 今年度の調査研究を終えて

今年度の調査研究は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、当初の調査研究スケジュールに大幅な変更を余儀なくされた。例年であれば6月～7月に今金町において地域の現状と課題の把握のためフィールドワークを実施していたが、今年度は感染拡大の影響により、大学も学生の学外活動の制限を行い、さらには今金町も町外からの来訪者を受け入れないといった事態になった。

この結果、当初予定のフィールドワークを断念し、感染状況の推移を勘案しながら、年度後半に集中的に実施することとして再計画を行った。しかし、感染の拡大は収まらず、再計画を実施することもできず、再々計画を行わざるを得なかった。

地域課題をテーマとしたPBL(問題解決学習)は、学生が自分の目で地域を見て、歩いて、感じて、課題について認識することから学びはスタートする。今年度は、現地でのフィールドワークを実施せずに、PBLの取組を展開せざるを得ないという特別な状況であった。まさに、「百聞は一見に如かず」、フィールドワークの重要性をあらためて認識する結果となった。しかし、今金町職員が来学し、同町の自然環境や特産品、そして深刻な地域課題等についての説明を受けたことにより、今金町のフィールドを理解するには有効であった。また、今金町担当者との打ち合わせには、Zoomを活用してオンライン会議も試行した。コロナ禍であったからこそ工夫して、得ることのできた成果も少なくない。

これまでの地域課題をテーマとしたPBLは、現地での活動を前提としているが、現地関係者が来学してのレクチャーや、オンラインツールによる説明・見学などにより、フィールドの理解を図ることも不可能ではない。このことは、道内の自治体のみならず、道外や国外の地域における課題解決をテーマにしたPBLの展開にも道を拓く可能性を感じるものであった。

現地でのフィールドワークを主としたPBLの教育効果には及ばないかもしれないが、教室で実施可能な地域課題解決のPBLのファーストステップとしては有効ではないかと思う。また、教室での活動なので現地への移動が不要であり、容易に展開できるというメリットもある。また、この教室PBLで、現状や課題の理解や活動へのモチベーションが高まった段階で、セカンドステップとして現地でのフィールドワークを位置づけることにより、一層効果的な活動を展開できる可能性が期待できるのではないかと考える。

コロナ禍にあった今年度は、学生が地域課題を理解し、学生自らが課題解決の方策を考え活動するまでには至らなかった。高齢化の進展する今金町において、深刻な地域課題となっている高齢者の健康増進のための解決方策として、健康動画の製作を提示し、学生は健康動画の製作を通して地域課題にアプローチした。時間も制約され、対面することすらできない状況であったが、学生の製作物は十分に評価できるものであると思う。様々な制約の中で、活動に取り組んでくれた学生には大いに感謝したい。

次年度は、製作した健康動画の活用方策やプロモーションについて検討し、今金町の高齢者が健康な毎日を送ることができるように、学生が中心となって活動を展開することができればと考えている。

最後に、再三の計画の変更にも関わらず、快く本調査研究にご協力くださいました今金町まちづくり推進課の職員の皆様をはじめ関係の皆様、心より御礼申し上げます。

## 【資料】「ネイパル深川・FW」事後アンケート自由記述

### ■今回の活動をふりかえり、発見したこと、気づいたこと。【1年・2年生】

【2年・男】今回、リーダー学生として初めての仕事で、班のリーダーとして話し合いをまとめていかななくては行けない立場だったのですが、初日、進め方がわからず四年生の先輩方に助けられてばかりで不甲斐ない結果でした。しかし、その反省を生かし、2日目の研修でかなり話し合いをスムーズにできたと私は思います。そして、普段あまり話さないタイプの1年生も積極的に意見を出してくれるようになり本当によかったです。

【2年・男】今回の活動は、数少ない同学科の1年生と他学科の4年生とのプロジェクトであったが良いディスカッションやプロジェクト自体の進行を円滑に行えたのではないかと。2年生が4人と1番少ない学年であったが、次の進行のためにどういう事に気を付けたら良いか、1人では気づけない事であっても全員で話し合い気づくことができました。1年生同士が誰と誰とが仲良いかわからない状態でプロジェクトが始まったが、4年生が企画をしていただいた交流レクリエーションによって1年生と2年生の仲、1年同士の仲が深まったと感じた。1年生が環境に慣れたこともあり、班ごとのディスカッションでは新たな案と的確な意見が多く出たと感じた。交流レクリエーションがなければ案として持っているが全員に発表できないことが起きたのではないだろうか。

【2年・男】初めてのプロジェクト参加で分からない部分がありましたが、2年生との細かい連携や先生方・4年生のサポートがあったおかげで、無事にプログラムを終えることができた。班を結成した当初は班員がどんな人であるのかが分からず、探り探りであった。班員同士の距離感が縮まらない中で、1日目の4年生が企画してくれたアイスブレイクを通じて、班の一体感を感じる事ができた。4年生の企画進行が非常にスムーズかつ盛り上げる雰囲気作りから、経験値の差を感じた。1年生は、前期は対面授業ほとんど無く大学に慣れきれない中で、このプロジェクトに参加してくれた。やはり、最初こそ緊張していたものの、時間が経つにつれて徐々に周囲と溶け込むことができた。環境適応能力が高いように感じた。2年生は各個人が班長として、活動の先頭をきり、上手く行かないこともあったが横の繋がりで助け合い、協力してプログラム進行に努められたと考える。

【2年・男】今回の活動を振り返り、特に1年生との交流というのが初めてだったので、とても新鮮な感じでした。また、話し合いの時には特に1年生も多く意見を出してくれていたのが頼もしかったです。しっかり1年生を信じて、自分も話し合いを進めて行けたらいいかなと思いました。またスポーツをしていたことやスポーツが好きなのは、みんな同じだと思うので、もっと身近な話題から仲良くなれたら、距離も縮まって意見も出しやすく、話しやすくなるのかなと思いました。

【1年・女】今回の活動を振り返り発見したことは今金の高齢者問題、そして今金の特産品で作った料理が美味しかったことです。また高齢者に特に多い身体の不調に対してどのような予防ができるか、予防のために高齢者が楽しく、続けられるストレッチやトレーニングを考えることが思ったより難しいこと、それをわかりやすく伝えることや、ストレッチやトレーニングについて自信を持っておすすめするにはたくさんの準備と労力が必要だということに気づきました。

【1年・男】今回の活動を振り返って発見したことは、学内で説明をしてもらった今金町の地域の特徴とアピールポイントの農業とその作物と高齢化などが進み過疎化しているということ。それに対し今回のプロジェクトでは今金町の自慢の野菜を使った減塩カレー作り、高齢者の転倒予防などを呼びかけるビデオ作りの話し合いをし、先輩とも話ことができましたし、どのような筋肉を鍛えれば予防につながるのかを自分たちで発見し、また話し合うことでより良い案や新しい課題を見つけることの大切さを学びました。

【1年・男】今回気づけたこととして自分は案外チームメイトと協力出来るんだなと言うことに気づきました。自分達のチームは認知症の予防のビデオを撮ることになったのですが、自分がこういう風にしてやればいいのかと意見をかなり多く言えてそこからどんどん話が発展していったのでかなりスムーズに決まりチームワークを発揮出来たと感じました。

【1年・男】今回初めて今金プロジェクトに参加してみても、2年生や3年生の先輩方のすごさを感じました。学校についてからの流れの説明、次に交流レクリエーションでは4年生の先輩達がより深く交流できるように工夫した数種目を用意してくれて楽しくレクリエーションをすることができました。さらに、ネイパル深川に着いた後、2年生の先輩達は食事の誘導や次の日の予定や時間について、さらに朝は部屋の整理などを何度も確認してくれました。そのような先輩方の積極性を見習いたいと思いました。

【1年・男】今回の今金プロジェクトで今金町には高齢化率の高い集落が多数存在し、生活する上で移動の場面や買い物の場面などにおいて苦勞している方がいるのだなと思いました。また、集落ごとの集会のようなものはどの集落も出席率が高く多くの町民が、集落の住民と関われる機会を楽しみにしているのかなという印象を持ちました。DVD作成の方では自分は腰痛の予防について取り組んだのですが、日常的な動作には腰を使って行うものが多く存在していて腰ってこんなにも大事なところなんだと感じることができました。まだまだ、調べて得られることはたくさんあるので14日までにたくさん吸収できるものを得ることができれば良いなと思いました。

【1年・男】発見したこと、気付いたこととしては、まず自分自身について。今回の研修に参加する前までは、上手に先輩方との会話に参加できるのか、自ら積極的に発言できるかなど不安を感じていましたが、先輩方が優しく接してくれたり「どんどん案出していいよ」など、アドバイスをくれたおかげで積極的に発言や話し合いに参加などすることができました。自分はまだまだできると気付かされました。それでもまだまだ人前に出て発表をしたり2年生のリーダー学生のやっているような行動をするには力が足りないとも気付かされました。

【1年・女】腰痛の予防方法について考えた。腰痛は腰の筋肉を鍛えれば良いと考えていたが、膝や股関節も繋がっているため鍛える場所は腰だけではなく、膝や股関節も鍛えなければならないことを理解した。予防方法を考えるときに憶測で考えるのではなく、確信している情報を共有しないといけないと感じた。同じ腰痛の予防方法でもスポーツ関係のもの、高齢者でもできる方法などやる人によって適した方法があるため、見極めなければならない。

【1年・男】今金の活動を通して、まずは初めての研修に参加できたことがとても嬉しいです。これまでの自分は

このような活動はしてこなかったののでいい経験になりましたし、先輩方との交流も普段の生活だとあまりできないので良かったと思います。今金町の現状を知ることができ、特産品を使っての昼食をグループで作れたので良かったです。今金町は高齢者の方が増えてきて人口が減ってきているのでそうならないためにはどのようにしたら良くなるかなど自分たちで調べて学ぶことができました。

【1年・男】4年生の方々から芝居のことや、認知症についての話を聞いて、経験を積むということがどれほど大事なのかを知ることができてよかった。インターンシップや今回のボランティアじゃないと経験できないようなことができるということが貴重なのかははっきりわかり、自分のためになるのがとても素晴らしいのだなと強く感じた。今後、レバングやコンサドーレなどの様々なボランティアがあったら参加して多くのことを知っていきたい。

【1年・女】演劇をやり、それぞれの傷病予防を普及するDVDを作るというのは、当日その場で聞く形となり少し戸惑いましたが、趣旨を理解し素早く対応することができました。班での話し合いはなかなか進まず、論点がずれてしまうこともしばしばありましたが、自分の意見をしっかりと発言し、うまく話し合いが進むよう視野を広げて聞くことができました。また、今回の研修は教育施設での宿泊となりましたが、新型コロナウイルスの影響による感染対策が徹底していて良かったと思います。2年生のリーダー学生の方達が中心となり洗面所のペーパータオルやゴミ袋の設置など、私たちよりも早い時間から動いていただいたおかげで、とても快適に過ごすことができました。黒子のように用意周到に動く様子を見て、すごいなと思いました。

## ■活動を通して、自分自身の成長や課題、今後の活動への抱負等。【1年・2年生】

【2年・男】やはり説明するのが自分自身苦手なのだと今回改めてわかりました。そしてリーダー学生として年下の学生をまとめる力がまだ不足と感じました。今後、リーダー学生の仕事に積極的に参加し、その力を伸ばしていけたらと考えています。

【2年・男】自分自身の課題として、話しが簡潔に伝えることができなかつたり周りを見るのが足りなかつたりということを感じていたが今回は意識したこともありこの2点については成長できたのではないだろうか。更に、継続して全員に均等に話を振り全員でディスカッションができた。そのようなこともあり今回は、話を周りに振ることを意識しすぎていま自分の意見を他のディスカッションに比べ少なかつたと感じる。今後は、話を周りに振りながら自分の意見もしっかり出して行きたい。

【2年・男】自分自身の成長としては、先を見通して準備・行動する力がついたと考える。プログラムの進行を行う上で、終着点から逆算してやるべきことを算出することを意識した。班員への情報伝達や、ディスカッションの際には優先順位を決めて話し合いを進めることで、スムーズに進行することができた。課題点としては、初対面の人に対して自らより積極的にコミュニケーションを取ること、理想のリーダー像を定めることがある。班員全員が初対面の状態で、一年生はなかなか話ずらい環境であったため、全体の緊張をほぐすジョークの一つや二つを言えるくらいの余裕が欲しい。周りの雰囲気や環境に合わせて自らアクションを起こせるようになる必要がある。また、理想のリーダー像を定めることで、自分の強み・足りない部分が明確化できるため、自分のリーダー姿を客観視できるようになりたい。

【2年・男】今回の活動をしてみて、自分自身の課題というものが多く見つかりました。今回は、初めて自分がグループリーダーで企画をしていくといったものだったので、物事の進め方に自信がなくなり上手く話せなかったり、進行具合も他の班と比べると遅れているといったところから、焦りも感じていました。特に1日目に関しては、個人個人の働きになってしまい、グループとして上手く機能していき、まとめられていなかったです。班の4年生のIさん、Mさんにも言われたように「自分の発言にまず自信をもつこと」や、「もっと班員に話をふってみたり、話し合いを楽しく盛り上げていく」と言ったことをしないといけないというのが今後自分に必要となってくる課題だと思いました。さらに、今後の活動に関しては自分たちは遅れを取っている分、話し合いの場を多くしていかななくてはならないと思うので、話し合いの機会を増やし、より良い活動にできれば良いのかなと思いました。

【1年・女】今までは考えても他の人の意見を聴いて自分の意見を積極的に発表していくことが出来ていなかったのですがグループのリーダーの話の振り方や役割の振り方がとても上手かったので自分の考えたことを積極的に発表していくことが出来ました。またグループの人の意見もしっかり聴くことが出来ました。課題と言うよりは目標になってしまいますが2日間グループのリーダーの動きを見て自分の意見もしっかり持っていて他の人の意見を引き出す力、その意見をまとめる力、周りを見る力がすごいと思ったので、もし今後リーダーとして動くことがあればグループリーダーのように動けるような人になりたいと思いました。今後の活動への抱負としてはこのプロジェクトはまだ始まったばかりですが段々と何をやるかが決まってきたり具体的などうするかもある程度決まっているので自分のやらなければいけないことをしっかり準備して今後の会議などが円滑に進むようにしたいです。

【1年・男】今回の活動を通して、自分自身の成長としては、まず、新しい友人や先輩と仲良くなることができ、コミュニケーション能力により自信を持つことができた所と、今金町の高齢者へ向けてのDVD作成についての話し合いでは、意見を出しより良い案や新しい課題を見つけることができ、解決策を考える能力が向上されたと思います。課題としては話し合いでは先輩や他の同年代の人の方が意見や案多く出ているので自分ももっと発言ができるようにしていくことが課題です。今後の活動へは、積極的に発言し中心になって話を進めていくことやより良い案を出すための研究を続けることを心がけていきたいです。

【1年・男】自分は認知症のビデオを撮るのですがそのビデオにはおじいちゃん、孫、脳トレの先生(テレビの中)が役人としているのですが、その中の孫役をやることになったので孫はおじいちゃんに芝居の流れを作ることが多い役なのでおじいちゃん役にしっかり流れを繋いでいきます。また認知症予防のビデオには孫とおじいちゃんの日常の芝居もあるのでそこも頑張ります。

【1年・男】今回の活動を通して今まで深く考えることのなかった町やテーマについて、グループで協力して話すことができました。この活動は今回が最後ではなくこれからも続き、ここからグループごとに台本や流れを作り最終的には来年2月にビデオを撮ります。そこでいいものが作れるように自分なりの意見や考え方を探したりして少しでも貢献できるようにしたいです。また、2年生や4年生の先輩に頼りっぱなしな部分がたくさんあると思うので少しでも先輩の負担を減らせるようにできればいいなと思います。

【1年・男】今回の自分の中の課題は、「積極的に意見を発する」ということを頑張ろうと思ってこのプロジェクト

に臨みました。たくさん腰痛について調べて、思ったこと感じたことを自分の意見として発することができたと思っています。しかしながら、もっともっと小さな疑問や小さいながらの自分の考えを発することができたならよかったなと思っています。また、自分だけでなくグループリーダーの2年生のTさんが悩んだりしていたら、自分も一緒に考えていくことができたならもっと円滑に話し合いを進めることができたのかなと感じました。まだまだ、このプロジェクトは進行していくのでしっかり自分のことだけでなく周囲のサポートというのもやっていければいいなと思いました。

【1年・男】自分自身の成長としては同学年だけではなく先輩方にも対等に発言できるようになったこと、自らが積極的に物事に対して行動したり手伝いをしたりできたことが主に成長に繋がったと思います。課題としては人前に出て話す勇気を出せるかどうか、まだ躊躇ってる部分があること。けれど、まだまだこのプロジェクトは続いて行くので今後もこの活動を通して大学生として、そして人としても成長していければと思います。2年生のリーダー学生の行動などを観察し、気になったことなど聞くよう心掛けてもいたので、とても勉強にもなりました。来年には先輩の立場にもなるので後輩のお手本となれるよう頑張りたいです。

【1年・女】班の中で話し合いをする際に情報を共有すべきなのにスマホで調べる時間が長かったため、あらかじめ情報は自分で調べてから話し合いに臨む。グループリーダーのTさんに頼りすぎていたため自分は何をしないといけないか考え、案を出す。Kさんが物を配布するときに1人で配布したら時間がかかると予測して手伝うように、周りを見て判断して行動する。先輩に自分から声をかけられなかったため挨拶など自分から声をかける。

【1年・男】私は、今までこのようなプロジェクト活動などには責任があると感じ参加してきませんでした。今回の活動を通して自分自身の成長できたと思うところは自ら進んで腰痛について調べたりしたことだけでした。課題は、先輩任せの部分があったし、積極的に行動できていなかったかなと思います。グループ活動の話し合いでも自分の意見がまとまらず言えなかったりしていたのではっきりと言えるようになりたいです。なので今後は、自ら進んで積極的に行動し、人任せにせず、その行動に責任をもって活動していきたいと思いました。

【1年・男】自分の思ったことや意見などは考えて出せたとは思ったけど、もっとみんなが考えてなさそうな意見を出したり、積極的に意見を出せるようにしたかった。レクリエーション等々で同学年の人たちだけでなく、他学年の方々とコミュニケーションをとれてとてもよかったと感じた。今後はDVDを作るためにグループで集まってどのような台詞で進めていくか、どういう芝居で進めていくのかを考えていくので、今回の2日間で出た課題を反省して、今後の活動に取り組みたい。

【1年・女】周りを見て自分がこなすべき役割やタスクを判断して行動に移せたことは自分の中で成長したなと思います。今までは慣れない場所であると周りの意見に合わせて、あまり自分で発言をしたりということができなかったけれど、思ったことを言えるようになったのが自分の中で成長できた点だと思います。今回は班のリーダーではなかったのであまり機会がありませんでしたが、自分が話し合いを進める立場になった際は、全員に意見を振り発しやすい雰囲気を作ることはもちろん、効率良く円滑な話し合いができるような進行をしたいです。全員で考えると意見は出ますが、なかなか話し合いが進まないのので、作業の分担などの工夫をし、テンポ

良く話し合いを回せる人になりたいと思いました。

## ■今回の活動で、良い経験になったこと、今後、活動の希望【1年・2年生】

【2年・男】普段話し合いでまとめる立場にないことが多いが、今回は最初からまとめる立場になり人の話を瞬時に理解する力が身につきました。今後、今の一年生がリーダー学生になった時また同じような事業があれば楽しいかなと思います。

【2年・男】特に良い経験となったことはリーダーになったことである。リーダーになったことで事前準備としてどのような事が必要になっていくのか知ることができ改めて4年生の進行のスムーズさと頼りやすさ、周りを見る力に差を感じた。去年の今金インターンシップの際に先輩のすごさというものを感じることができたが、自分がリーダーという立場になり、その立場ではわからない大変さを知ることができた。1年生にどのような言い方をしたら伝わるか、4年生ならばどのように伝えているか等を意識して行動をした2日間であった。今金プロジェクトと少しかけ離れてしまうが、1年生に対してリーダー学生として何かできないだろうかと感じている。去年は、新入生研修として札幌ドームの観戦や青少年自然の家での取り組みなどリーダー学生がどのような事しているのか分かった部分もあり、リーダー学生の活動内容が想像することができたが。今年は1年生に対して活動できていないため来年のことも考え何かできないだろうか。

【2年・男】今回の活動では、学生主体でプログラム進行を行ったことがいい経験になった。先生方ではなく、学生主体でプログラム進行することで、他人に頼る部分や甘えの部分をほとんど無くすことができた。この環境下で、どのようにすれば物事が上手くいくのか、どのようにすればスケジュール通りに進行できるか等、各々が主体的に考える場面が多かった。そのため、プログラムを通じて参加学生各々の自主性や言動に対する責任感を養うことができたように感じる。他責ではなく自責の意識を強く持って今後行動していきたい。

【2年・男】今回の活動の中では、特にリーダーシップをとって話す機会が今までなかったのも、とても難しい仕事でしたが、今までにない経験であったのもとても良い経験でした。自分的には難しく考えすぎたり、班員に明確に指示を出せていなかったのも、もっと自分のことだけでなく、周りの状況把握もしっかりしないといけないといったことも考えることができました。あとは、もう完成させるしかないのも、みんなで話し合いながらも意見を出し合っていく大切さも考えられたらいいなと感じました。毎度毎度リーダーというのは、自分にはまだ荷が重すぎるなと思いました。今回4年生の良いところが多く見習える良い機会であったのでいい経験になりました。

【1年・女】部活動に入らない限りあまり先輩方とは関わる機会がありませんがこのようなプロジェクトを通して普段関わらない人とも関わる事が出来たり、話すことが出来たのはいい経験になりました。具体的には同室がスポーツ指導の4年生の方だったのですが4年生ということもあり大人の余裕を感じ取ることが出来ました。就職活動の話や大学での授業の事など今後の大学生活で役立ちそうな事もたくさん聞けたのでこのような機会があつて本当に良かったです。

【1年・男】今回の活動の中で、特に良い経験になったことは、今金町の高齢者に向けての転倒予防などのプロモーションDVD作成についての話し合いで、先輩が一つ上とは思えないくらいの仕切る力、判断能力、リーダーシップ能力に長けていて、自分では思い付かない意見、案をいくつも出していたことに驚きました。それを自身への刺激として受け取りこれからの人生ではリーダーシップ力を上げることを意識し何事も積極的に取り組んでいく姿勢が大事なんだと学び良い経験になりました。

【1年・男】先ほど述べた芝居の孫役をやることになったことがいい経験になりそうです。またどのような芝居をするかという話し合いでも自分からかなり話が出来てそれを先輩方が真剣に聞いてくれたので自分の意見を相手に理解して、実際にそれを採用して貰えたというのがいい経験になりました。またこの芝居についてはまだ実際にはテーブルで話しただけなのでどこまで自分達が出来るのかを知るいい機会になりそうです。今後の活動でやりたいことは実際に今金町に行って芝居でやっていた認知症予防の頭の体操を今金町の人達とやりたいです。

【1年・男】今回の活動の中で特にいい経験になったことは先輩のすごさを近くで感じられたことです。話し合いの司会進行や伝わりやすいような話し方、周りの細かい部分にも目を配り積極的に行動する姿を見て自分も見習いたいと思いました。自分が同じ立場だとしたらあんなふうには出来ないので1年後にはあんなふうにはなれたらいいと思います。今後もこのような活動があればぜひ参加できたらしたいと思います

【1年・男】今回のプロジェクトで、腰痛のことについてたくさん調べたくさん吸収できたことが良い経験になったかなと思いました。このプロジェクトに関わっていなければ腰痛のことについて調べることもなかったし、スポビやスポ指の先輩方と意見を交流しあうというのもなくったと思うのでとても良い経験になりました。また、先輩方と意見交流ができたおかげで自分とは違う視点から物事を見た意見などを聞いて、もっと多角的に物事を見ていかなければならないなど勉強にもなりました。同じスポビの一年生とももっと仲を深めることができ参加して良かったなと感じました。

【1年・男】グループワークにて、積極的に発言し案を出せたこと。それは先輩方の優しさや同級生の積極性に僕もどんどん参加しなければと奮い立たせてくれたおかげです。それと一人部屋だったことで全て自分で部屋のことを管理しなければならなかったのも、自己管理という面でも良い経験になり成長できたと思います。今後の活動では、またグループで議論をしたり、打ち合わせ、さらには撮影にも入っていくと思うので、今金町の高齢者の方に良い作品をお届けできるよう精一杯活動をこなしていきたいと考えます。

【1年・女】腰痛の予防策について考えたことが今回の活動の中で、最もいい経験になった。理由はグループで話し合う際にスマートフォンで調べる時間が長く情報を共有できなかったことで次回からは話し合いの前から調べておかなければならないと学んだから。

【1年・男】今回の活動で特にいい経験になったことはグループワークです。グループワークは自分にとって身に付いたことや課題を発見することができました。自分たちのグループは腰痛について話し合いましたが知識がほとんどなかったのも自分たちで調べ、聞いたことのない言葉やどのようにしたら腰痛になってしまうかなど知

ることができたので普段調べないことを調べたので良かったと思います。もしつぎ自分がグループのリーダーになったら、司会の進行の仕方や、メンバーをまとめあげることが重要になってくると思うので先輩の行動を見て学ぶことができました。

【1年・男】今金町の現状を知ることができてよかったと感じてる。その理由は、なかなか高齢者の割合が多い地域についてよく知らなかったり、行ったことがなかったりと知識がなく話を聞くと地域をどうにか活性化させることができないのだろうかと考えられるようになれば、今金町のいいところも知ることができてとても嬉しく感じた。また、認知症に関する内容もどういう症状があるのか、どう予防すれば良いのか調べると、数多くの答えが出てきてとてもびっくりした。これらの調べたことを活かして企画を成功させたいと思う。

【1年・女】班で取り上げていた認知症について、今まではイメージでしかわからなかったことを、調べたりすることにより症状や予防策などを知ることができたことは良い経験になったなと思います。実際認知症というのは当たり前にも身近に起こりうることなので、その対応などもしれてよかったです。また、班での研修以外で女子のメンバーのみんなとも交流でき、楽しかったです。スポーツ指導とビジネスであまり接点がないかもしれませんが、就職の話や大学生活の話などを四年生の先輩方から聞いたことはとてもためになりましたし、興味深かったです。とてもいい思い出ができました。初日の導入にやったレクリエーションは今後も続けたらいいと思います。班のみんなとの交流を深めたり熱中して楽しめるゲームが多くありよかったです。何種類もゲームがあり、また一つの項目の時間は長すぎず短すぎず、やっていて飽きたりすることもなくずっと楽しい時間でした。

## ■今回の活動をふりかえり、発見したこと、気づいたこと。【4年生】

【4年・男】今までは自分のリーダーシップを鍛えるために、積極的に行動、発言などをし、グループ等をまとめるよう意識してきました。それらを後輩ができるようサポートするという立場となると、必要以上に手を貸してしまい、加減が難しいと感じました。しかし、2年生のリーダー学生は、思っていた以上に成長が早く、リーダーシップが元々備わっていたのもあり、途中からは何も手をかきなくても良いと思うほどに至っていて、素晴らしいと思いました。

【4年・女】グループ内の活動や意見を尊重して発問だけでアドバイスや進行の補助をするのはすごく難しいなと感じた。意見を尊重して元よりも一つ良いものや見せ方などをプラスしていくには柔軟に対応できる知識がまず大切だなと感じた。リーダーではなく全体を冷静に見ていると個々の学ぶ姿勢や積極性、性格はなんとなく把握できるなと感じた。一番強く思ったのは、対面授業の大きさや日頃のコミュニケーションがいかに大切であるかを気付かされた。1年生はほとんど面識のないままであり、お互いの壁や男女の壁を見ていてすごく感じた。

【4年・女】今回は、スポーツビジネス学科の一二年生のサポートということでお手伝いさせていただきました。普段関わることのない人たちと交流をし、プロジェクトを見守っていく中で改めて人をまとめる難しさや、答えのない課題を考えることの大変さを実感することができました。また一年生は、知識や経験が全くないところか

らのスタート二年生が、その一年生たちを、どうやったらうまくまとめられるかそれに対して、どこまで教えてあげていいのかという点では、すごくいい経験になったのではないかと思います。

【4年・男】今回他の学科の後輩たちとこのような行事に参加することは、初めてだった。グループ活動で1年生は、2年生の進行に対し積極的に意見を出し面白いぐらいにいい意見がたくさんでていた。このような行事で縦の繋がりを作ることは、今後の学校生活において大切になってくると感じました。自分の反省としては、グループ活動の際少し話し合いに入りすぎてしまったのかなと感じた。

【4年・男】リーダー育成に関してすごく難しいなと思った。自分がリーダーの立場だったらこうするのに、もっとこうすれば効率よくいくのと思うところがあったが、今回あえてリーダーに対して言わず、彼の主体性を大切にサポートする形にした。だが予想以上に彼は手こずっていたと思う。そこでサポーターである私が救いの手を差し伸ばすべきだったのだが、彼がどこでどのように手こずったのかが判断が付かなかった。その部分がリーダーを育成する側としてすごく難しかったなと感じる。

【4年・女】はじめは上級生とのプロジェクトというもあり、1年生の雰囲気はまだどこか硬いなというように感じました。しかし、今回1泊2日でプロジェクトを行なったことで、1年生同士だけではなく、学年を超えて交流を深められたなと感じています。はじめのレクリエーションもギクシャクした雰囲気からのスタートでしたが、終盤に向かうにつれて、みんな笑顔が多く見えるようになり、レクリエーションの効果を実感できました。また、先生方が一緒に入ってくくださったおかげで雰囲気も和み、盛り上がったのだとても感じています。本当に感謝しています。2年生も一人一人個性があり、もともとリーダーシップがある人もいれば、あまり場を仕切るタイプではないという人もいたため、一緒に成長できたらいいなと考えています。

## ■活動を通して、自分自身の成長や課題、今後の活動への抱負等。【4年生】

【4年・男】初めてのリーダー育成のためのサポートという立ち位置を経験し、リーダーシップや、それぞれの案などを引き出すということが課題となりました。今までは自分がリーダーシップを鍛える場が多かったため、自分が案を出したり、まとめたりということで手を貸して過ぎてしまいそうになりました。しかし、それだと後輩の成長にならないため、今後そのような立場になった際、より引き出してあげることができるようにしたいと思います。

【4年・女】今回は全体を見る役をしていて、何をどの順番で考えるか、どの順番でとりかかるべきかなど明確なアドバイスが出来ずにいたので、自分の中で落とし込みさらに人に理解してもらおう説明が出来るようになりたいと感じた。冷静に見ていて、意見はあるけど言わない人や個々のスキルなど最初の段階で性格的な部分を見つけることが出来ていたが、それをグループリーダーに伝えることが出来ずにもう少し上手く回せるしもう少しスムーズに進行できるかな。と思う部分が沢山あったが、それをなかなか伝えられずにいた。グループリーダーをもう少し助けてあげられる場面がたくさんあったなと感じた。

【4年・女】普段関わることない人たちと関わり、交流することで人より深く向き合えるようになったと実感しました。課題としては、グループになった時積極的に話し合いにうまく参加できない人に対するサポートの仕方

や、グループがうまく活動できていないときにどうやればうまくいくのかを教える際に的確なアドバイスの仕方  
やまた、自分自身の知識不足を感じました。

【4年・男】自分の課題としては、ゲームの説明などをする際にもっと伝えやすい言い回しを心がけて行きたい  
と感じた。あとは、後輩たちからの質問に対してエビデンスにもとづいた回答ができるようにこれから論文など  
を探して読んでいきたいと感じた。

【4年・男】リーダーに対してのサポーターの仕方の工夫をするべきだった。また自分は今回あえてリーダーの  
彼の主体性を大切にしながらその導き方の工夫をもっとするべきだった。例えば話し合いの進行に悩んでいたら  
少し会話の間を割って脱線した話し合いをまた軌道修正するといったことをするなど工夫の仕方は沢山ある。

【4年・女】今回はリーダーではなくサポートという形で参加させていただきました。私は教職課程も履修してい  
るため、この3年間でリーダーという力はとっても身についたと感じています。逆にいうと、リーダーという役割  
ばかり行なってきたため、サポートという役をあまり経験したことがありませんでした。そのため、プロジェクトの  
話し合いの時などに自分から意見を言い過ぎてしまったり、仕切ってしまうようになることが多々あったりまし  
た。途中でそれに気づき意見が浮かんでも一旦言葉には出さないようにしました。そして、1、2年生に質問され  
た際や、行き詰まってる時にそれを伝えるようにしました。こうしてサポート役について学ぶことができました。  
まだまだサポート役として未熟なので、このプロジェクトを通して成長していけたらいいなと考えています。

## ■今回の活動で、良い経験になったこと、今後、活動の希望【4年生】

---

【4年・男】まず、リーダーを育成するためのサポートという立場という事が良い経験となりました。自分が今ま  
でそのような立場の方達にサポートしていただいていたことは、加減が難しいという事を知りました。今後サポ  
ートする立場になった場合は、よりサポートする人の良さを引き出せるようにしたいと思いました。今回の今金  
プロジェクトのプロモーションビデオ作成では、自分達も初めての試みのため、4年生にとっても良い経験にな  
るのではないかと思います。外部で活動している役者の活動を活かせる場とも感じました。今後は、コロナの  
影響から対面が難しくなるため、このようなビデオを用いて様々な地域の活性化に繋がる活動が発展してい  
けば良いと感じました。

【4年・女】客観的に見て、それぞれのリーダーに良いところも沢山見えたが、まだ出来ていない部分もたくさん  
見えてリーダーとしてどんな能力やスキルが必要かというのを改めて見る事ができた。さらに、他学科の後輩  
と関わることは4年間でなかったもので、こういった一泊2日で他学科の先輩と関わるのは1年生にとってのこ  
れからの学生生活の生活の仕方が明確に見えたりモチベーションに繋がるのではないかと感じた。さらに私た  
ちも新鮮な気持ちで、人を指導するという立場を社会人になって初めて行うのではなく、総まとめ的な捉え方  
ができていいなと感じた。今後もこういった活動は行った方がいいとは思いますが、劇を作るなどの複数の人た  
ちが詳しく関わらないところをやるよりももっと簡単な物だと意見も出やすくコミュニケーションが測れるし、成功  
体験として何か残るのではないかと感じた。

【4年・女】今回は、スポーツビジネス学科の一二年生のサポートということでこの今金プロジェクトに参加させていただきました。主体に動くのではなく、あくまでもサポートという形で活動することは今までなかったのでもみんなと一歩下がった状態でみるのでまた自分たちがやってるのときの難しさや大変さとは、少し違いました。一歩引いた状態から見てどうしたらいいのかを深く考えれる経験を積めたのはとてもよかったのではないかと思います。また今後も自分たちが主体になって行う活動もより増やし成長した段階で一歩下がった状態でみるサポート役でもさらに成長を積めるような活動が増えればよいなと思いました。

【4年・男】今回特にいい経験になったのは、3歳下の後輩たちと2日間グループでの話し合いを通して、こんなにもいい意見が出るのかと感心しました。これは、同年代だけでやってもここまでいい話し合いは、出来なかったと思います。このような縦の繋がりを作り話し合いをすることで刺激のある話し合いができるようになったんだと思います。来年、再来年もこのような活動を続けていけばビジネス学科の学生にとってプラスになるなと思いました。

【4年・男】今回は新型コロナウイルスの関係で実際に今金町に行くことは出来なかったが実際に町に行くことで分かることもあるし、座学では分からない事があるので実際に行くような機会を作ってあげて欲しい。

【4年・女】4年生になって下級生と関わる機会はないと思っていたため、このような機会はとても貴重だと感じました。私はリーダー学生をしたかったのですが部活の関係でできなかったため、あまり下級生と関わる場面がありませんでした。いざ関わってみると、自分が1年生だった時のことを思い出し、さらに今は新型コロナウイルスの関係もあって中々登校できなかつたため、不安もいっぱいなのだろうと感じ、より一層サポートしてあげないと、という感情が生まれました。その中で、交流を深めつつも先輩としてのプライドを持って接するというのが少し難しいなと感じました。下級生との距離が近すぎても遠すぎてもいけない絶妙な関係を作ることに少し苦労しましたが、これもとてもいい経験だと感じました。

## 【参考】今金町と札幌国際大学の地域連携事業

### 今金町と札幌国際大学の地域連携事業に関する協定書(平成24年10月16日)

(目的) 第1条 この協定は、両者が包括的な連携のもと、産業、文化、まちづくり、学術の分野等において相互に協力し、地域社会の発展と人材育成に寄与することを目的とする。

(協力事項) 第2条 両者は、次の事項について協力する。

- (1)産業振興に関する協力 (2)地域文化の育成・発展に関する協力 (3)まちづくりに関する協力
- (4)人材育成に関する協力 (5)学術に関する協力 (6)その他必要と認める事項

### 平成24-26年度

本学の有するノウハウや研究の蓄積及び関係機関とのネットワークを活かし、観光による地域産業の活性化、交流人口の増加を目指して本学学生と地元住民(今金町人流創生プロジェクト協議会)が協力し、今金町の魅力を探り、その魅力を町外に発信する「地域資源発掘・再発見事業」、や「田舎暮らし体験事業」をはじめ、外国人留学生をモニターとしてインバウンドの可能性について検証する「外国人留学生による今金インバウンドモニターツアー」、冬季の旅行商品開発のための「冬の今金モニターツアー」などのプロジェクトに取り組んできた。

#### ■ 札幌国際大学生と今金町の若者による“シャベリ場”「今金を語ろう」

ワークショップをととして、地元住民(若者)が感じている今金の魅力を大学生に伝え、次回のフィールドワークの参考とすることを目的として、今金町民センターで開催した。

#### ■ 札幌国際大学生受入事業報告 札幌国際大学今金研修 ～今金を探ろう！～

今金町の魅力・地域資源発掘・再発見を目的に、前回の冬に実施した体験プログラムをベースに企画した旅行プログラムを、実際に学生自身が体験し評価・提言を行った。

### 平成27年度 奨励共同研究(特別教育プロジェクト)

#### フットパスの可能性に関する研究 ―今金町を中心に―

地域連携事業の協定を結ぶ檜山管内今金町をフィールドとして、フットパスモデルコースの設計・検証を行ない、地域観光振興のツールとしてフットパスの可能性についての共同研究を行った。

### 平成28(2016)年度 奨励研究

#### 地域資源を活用したまちづくりに関する研究 ―今金町フットパスの活用方策について―

前年度の研究成果を踏まえ、今金町においてフットパスプログラムを取り入れたモニターツアーを実施し、成果と課題を明らかにするとともに、同町のフットパスコースの今後の活用方策について検討する。

### 平成29(2017)年度 奨励研究

#### 学科の学びを活用する能動的学修の展開 ～今金町美利河地区の地域課題を焦点に～

今金町美利河地区をフィールドとして「健康」「歴史」「観光」をキーワードに、地域課題の解決方策を、次代を担う今金町の子供たちと協議し、提案する。学科の学習を生かすことができるように、キーワードとリンクする学科から学生を選抜し、ファシリテーターとして子供たちの学びの支援にあたる。こうした活動により、学内での学びを生かした学外での能動的学修(アクティブ・ラーニング)展開の方法についての資料を得ることを目的とする。

平成30(2018)年度 奨励研究

住民との協働による能動的学修の展開 ～今金町美利河地区をフィールドとしたプロジェクト学習の推進～

昨年度、同町美利河地区をフィールドとして「健康」「歴史」「観光」をキーワードに、地域課題の解決方策を同町の中学生や町民と協議し、提案を行った。今年度は、提案内容(プロジェクト)を現実のものとするための情報収集、試行検証を重ねる。こうした課題設定、計画立案、実施、反省・評価の一連の過程を通して、プロジェクト学習の教育効果や推進のための資料を得ることを目的とする。

令和元(2019)年度 奨励研究

連携自治体におけるインターンシップの可能性について～課題設定と評価方法を中心に～

本研究は、課題解決型「インターンシップB」の実施について、本学と地域連携協定を結ぶ自治体における活動の可能性を検証する。本学では、現在道内7つの市町村と連携協定を結んでいるが、平成24年(2012)度の協定締結後、多彩な連携事業を展開してきた実績のある今金町をフィールドとして、自治体における課題解決型インターンシップを実施する上での課題設定、活動内容、評価方法等の資料を得ることを目的とする。

令和2(2020)年度 奨励研究 調査研究報告

地域課題に焦点を当てたリーダー育成に関する実証的研究 ～リーダー育成モデルプログラムの検討～

地域課題の解決に焦点を当て、リーダー育成モデルプログラムを検討し、新カリキュラム作成の資料等を得ることを目的として実施する。特に、人口減少と高齢化のすすむ小規模集落における高齢者の健康をテーマに、健康の維持及び介護予防の観点から、解決方策の検討に取り組む。

令和2(2020)年度 札幌国際大学 奨励研究  
地域課題に焦点を当てたリーダー育成に関する実証的研究  
～リーダー育成モデルプログラムの検討～

調査研究報告書

令和3年3月

札幌国際大学

〒004-8602 札幌市清田区清田4条1丁目4-1

TEL 011-881-8844(代表)

1. 研究テーマ：学生の学びを基軸とした地学協働に関する可能性に関する共同研究

期間：2020 年度

2. メンバー：池ノ上 真一（統括）

阿部 啓子（留学生等による外国人支援プロジェクト）

佐々木 清美（清田区レジリアンス強化プロジェクト）

田村 こずえ（観光地域課題解決プロジェクト）

3. 研究の背景

札幌国際大学は、2019 年度に策定した中期目標・中期計画において、「地域・産学連携センターが地方自治体、地元産業界と連携して、産学連携、地域活性化のためのシンクタンク機能、社会人の学び直し、生涯学習講座等の様々な地域連携を総合的に実行する。地域連携においては体制整備、生涯研究、地域交流、人材育成、実践研究、領域横断の共同研究等の将来目標と計画内容を具体化し総合的な推進方策を令和 2 年度までに策定する」としている。その中で、学生の学びに関連する事項としては、①「地方自治体又は地元産業界等との連携による地域課題の解決を目的」とし大学に貢献する研究のあり方を探ること、②学生の地域ボランティアに関する単位認定制度や支援するためのセンター等の設置の検討、③地域防災に係る人材の育成に関する教育プログラム、あるいはリスクマネジメントに関する地域連携の検討、④ホスピタリティ分野等に関する専門職大学・専門職大学院の設置の検討が挙げられる。

他方、北海道の各地域では、グローバル化が進む中で、多様性社会や SDGs の実現、インバウンド観光や留学生の拡大に対応した効果の最大化とリスクの軽減といったマネジメント、さらには、コロナ禍を含めた災害リスクや多文化共生社会への移行過程で想定される社会変化リスクに対応したレジリアンな地域社会の仕組みづくりが地域課題として挙げられる。

4. 研究の目的

そこで以上の背景から、学生の学びを基軸とした本学、および地域のニーズに合った地学協働を推進し、持続可能な仕組みのあり方について検討し、次年度以降の実践段階のアクションプランを策定することを目的とした。

とくに対象地としては、北海道の政治・経済の中心地であり、本学が立地する札幌市、および清田区、そして中規模都市であり、市町村魅力度ランキング（ブランド総合研究所「地域ブランド調査」調べ）で 2019 年度 1 位（通算 6 度）であり、インバウンドをはじめ、全国有数の観光地である函館市・道南地域を対象とした。

具体的には、以下の項目に沿った取り組みを行った。

(1) 留学生等による外国人支援プロジェクト：地域連携テーマ①、②に対応予定

札幌市に暮らす在住外国人は、日常生活を送る上で役所での手続き、町内会活動、育児や子どもの教育のこと、病気や怪我をしたときに、言葉が通じない、文化や習慣が違うことを原因とした様々な困りごとが発生している。また、災害時の対応についても課題がある。この課題を解決することは、インバウンド観光客の増加を目指す国や北海道の戦略に貢献する観光インフラの整備のひとつとなると考えられる。

それらを踏まえて、本学留学生等の学びの機会と地域の国際化への貢献の可能性について、札幌市役所をはじめとした関係各所と検討を行った。とくに、「やさしい日本語」の考え方を応用し、本学留学生ボランティアを組織した仕組みづくりについて検討した。

(2) 清田区レジリアンス強化プロジェクト：地域連携テーマ②、③に対応予定

札幌市清田区は、市内でも住宅街が広がるベッドタウンであり、とくに子育て世代の転入数が転出数より多いなど、暮らしやすい地区として評価されている。

他方、当該区は、北海道胆振東部地震の際、宅地や道路、公園で大規模な地盤沈下が発生、停電を含めて甚大な被災が見られた。また、安全安心なまちづくりは、宅地が大部分を占める清田区にとって重要な課題である。

そこで、本学学生の学びの機会の創出であり、地域貢献や社会勉強の機会としてのボランティア機会を創出する仕組みづくりについて、清田区の地域防災をはじめとしたまちづくりやリスクマネジメントをテーマとして検討を行った。とくに、公共としての清田区、学生等の活動力や教員による専門性をもつ本学の強みを活かした仕組みづくりを検討した。

(3) 観光による地域課題解決プロジェクト：地域連携テーマ①、②、④に対応予定

全国でもとくに人口減少が深刻化する北海道において、交流人口や関係人口を拡大させる観光は、社会、経済、文化の各分野において地域が抱える課題の解決に資すると期待されている。加えて、with コロナ期において、地域が観光客を選ばなければいけない状況も見られる。つまり、どのような観光客に来てもらい、どのように滞在してもらい、地域を出た後にどのように経験を共有、あるいは地域と付き合ってくれるかが、地域課題解決のためには大変重要となっている。

そこで、地域課題、および観光動向が顕著な函館市・道南地域を対象とし、地域課題解決のための観光まちづくりを進めるためには、どのように観光に関する地域情報を誰が、誰に、どのように届けるかに関する検討を行う。その際、コロナ禍による外出自粛に代わって成長しつつある Zoom 等のリモートによる観光ツアーや、人や地域間をつなげる会議等のシステムの可能性についても検討する。加えて、グローバルな視点からホスピタリティマネジメントに関する人材育成プログラム等の開発の可能性の検討も行う。

以上から、ヒト・モノ・カネ・情報に関し、本学からの持ち出しを続ける従来型の地域連携ではなく、地域・本学ともに Win-Win の関係となる地学協働を目指し、持続可能な仕組の構築を目的とする事業としたい。事業期間としては、まずは3カ年を想定し、2020年度は1年目の取り組みである。

## 5. 各プロジェクトの報告

### 5-1 留学生等による外国人支援プロジェクト（担当：阿部 啓子）

#### (1) プロジェクト概要

前述した問題意識を踏まえ、「やさしい日本語」の考え方を応用した本学留学生ボランティア等を組織した仕組みづくりについて、札幌市役所の担当部局とあり方や発展の可能性について検討した。ただし、コロナ禍の拡大のため、実証的な取り組みは実施することが出来なかった。

#### (2) 札幌市役所総務局国際部交流課との意見交換

清田区役所から紹介を受けて、当該部局に実施のための意見交換に伺った。その際に当方から提案した内容は以下のとおりである。大きくは、1) 地域コミュニティとの交流活動の場の提供、2) 札幌市在住の外国人に対する日本語支援といった2点の提案をしている。

### ○外国人住民支援に向けた地域連携プロジェクトに関する提案

札幌市在住の外国人に対する持続可能な支援を目指し、札幌市と本学留学生および日本人学生（以下、本学学生）による地域連携プロジェクト

#### 留学生等による在住外国人支援プロジェクト

実施年度 2022年4月

目的 1. 地域コミュニティと留学生等の交流機会創出と地域の国際化に対する取り組み  
プロジェクト → 1) 地域コミュニティとの交流活動の場の提供

目的 2. 地方自治体等との連携による地域課題の解決を目指した地域貢献としての取り組み  
プロジェクト → 2) 札幌市在住の外国人に対する日本語支援

#### 1) 地域コミュニティとの交流活動の場の提供

##### 【地域参加に関するアンケート結果】

（以下 令和2年札幌市外国人市民アンケート調査結果報告書より）

・日本人と一緒に「地域の活動には参加していない」が約6割

・地域の活動に参加しない理由

「地域活動に関する情報がないから」48.2%

「時間がないから」46.2%

「知っている人がいないから」44.7%

- ・今後、地域の日本人としたい交流  
「趣味やスポーツを一緒に楽しみたい」 46.3%  
「日本の文化や習慣を学びたい」 45.6%  
「地域やまちのボランティア活動がしたい」 29.6%

↓

交流可能な機会および場（活動）の提供・学びの場の提供

### 【交流促進に向けた活動の提案】

本学学生と在住外国人との交流機会の創出

活動例 1) プロの料理人と生産者による食育の場づくりとしての子ども食堂

活動例 2) 留学生による外国語講座やご当地料理教室の開催等

## 2) 札幌市在住の外国人に対する日本語支援

### 【日本語に関するアンケート結果】

- ・日本語を話す能力は「問題なく話せる」（43.3%）「ある程度話せる」（29.8%）＝7割強
- ・日本語学習方法  
「本、インターネット、テレビなどを使い、ひとりで学んでいる」 51.0%  
「通っている大学や学校、職場で学んでいる」 33.5%
- ・これから札幌で暮らしていく上で、学ぶ必要があると思うこと  
「日本語」 61.6%  
「健康保険や年金などの社会保険のしくみ」 46.1%  
「税金のしくみ」 41.6%
- ・自由記述より
  - ・私は今、シングルファザーとして子供と暮らしています。会話と読解力は準上級ですが、病院や学校でのやりとりには困ることがあります。また、文書に使われる日本語はフォーマルで知っている単語も多くないので、学校からのレターを読むのが難しいこともあります。
  - ・日本語勉強教室が少ないです。各地域に日本語を勉強できる機会を増やしてほしいです。
  - ・ここに住み続けて生活を築いていきたいのですが、今の私の日本語では難しいです。日本語や文化を学べる無料で通いやすい学校があれば、大好きなまちで税金を払い暮らしていくのと思います。
  - ・日本語能力は現在の仕事だけでなく、日常生活でも重要です。札幌に住んでいる間、日本の社会や文化を理解するために勉強したいです。「札幌に住んでいる外国人」のための日本語教室や参加できない他の人のためビデオレッスンまたはオンラインクラスがあったらよいです。

- ・ごみ分別、防災など、いろいろな資料を配布されたけど、あまり見ないです。チカホでの防災宣伝活動も内容的には分散的で、システム的な学習や演習などもないです。もし、外国人向けの（ゴミ分別、防災など）講座やセミナーなどがあれば、効果的だと思います。
- ・時々感じたのは、知らないうちに失礼なことをしてしまって、自分の文化の中で普通なことですが、日本人から見れば、失礼なことになってしまいます。でも、誰も教えてくれなから、外国人に文化の違いなどを教えてほしいです。
- ・私は外国人ですが、できるだけ日本のやり方を理解し、合わせようとしています。しかし、日本人が外国人の行いに対してそれは日本では正しくないと言うのを何度か見たことがあります。日本人にとって調和が大切なのは理解していますが、教育も大切です。私が変なことや間違ったことをした場合は、丁寧に敬意をもって伝えてほしいと思います。

↓

日本語学習機会の提供・日本の習慣やマナーなどの情報提供

#### 【日本語支援に向けた提案】

①本学学生と在住外国人による協働学習の機会創出

②日本語学習機会の提供

活動例 1) 観光学部の学生と行く観光地巡り（交通情報や習慣、マナー等情報の獲得）

活動例 2) やさしい日本語による学び合い

在住外国人の地域コミュニティ参加に対する支援は、単なる生活情報の提供ではなく、アクセス可能な人的リソースの提供となる。また、本学留学生にとっては、日本の社会を学ぶ機会となり、日本人学生にとって多文化共生を通じた社会人基礎力の養成となる。

#### (3) プロジェクトのまとめ

本年度の取り組みについては、前述したとおり札幌市役所担当部局への提案と、それに基づく意見交換のみとなった。意見交換の中では、札幌市としても当該課題への問題意識はあること、また国際交流プラザと連携した関連したイベントは実施されていることが分かった。しかし、本プロジェクトが掲げる地域課題は、社会構造に関わる問題が背景にあることから、イベントだけでは意識啓発としての取り組みでしかなく、根本から変革することは難しいことも分かった。

今後のあり方としては、札幌市の関係部局が行うイベントと本学の取り組みが共催等の形態により始動し、まずは現状の把握や実践における諸課題の解決に取り組む。その繰り返しの中で、仕組みづくりへと発展させる取り組みが出来ることが重要であると考えられる。また、本学が当該取り組みを展開するためには、行政との役割分担を踏まえると、やさしい日本語の専門家の存在が重要なポイントであると言える。

## 5-2 清田区レジリアンス強化プロジェクト

### 1. プロジェクトの概要

札幌国際大学は清田区に位置し、区内の指定避難所（地域）<sup>1</sup>となっているが、これまで地域の防災拠点としての活動にまでは至っていなかった。しかし、2018年の北海道胆振東部地震の際、ブラックアウトによる通信の遮断から、清田区内に在住する学生を中心に大学に駆け込む学生も少なくなく、年に1度実施する火災を想定した避難訓練のほかに、「地域防災」に対する大学としての取り組みも今後の大学活動として必要となることを痛感した。

この状況と軌を一にするように、「私立大学等改革総合支援事業<sup>2</sup>」では、令和元年度より、タイプ3「地域社会への貢献（地域連携型）」において、「地域防災に係る人材を育成するため、社会人を対象に地域防災に係る一連の教育プログラムを実施しているか」という「防災にかかる人材育成」の設問があらたに設けられ、これの実施如何が問われた。

要件としては、次のように設定されている

- 複数回（日）の受講を前提とする教育プログラムを実施
- 地域防災人材を育成するため、地域住民等や、地方自治体の職員、防災担当者や医療・福祉などの専門職などに対し、地域の防災に係る教育プログラム（例えば、防災計画の策定、防災組織の活性化、災害対応におけるスキルなどに関するプログラムなど）を実施するもの
- 地方自治体は所在地域を問わない<sup>3</sup>

本活動においては当然地方自治体、地域との連携なくしては実施することができない。そこで令和4年度の新カリキュラムでのリスクマネジメント、社会人も対象となりうる防災教育に関する新規科目開設の意向も含め、今年度については可能性を探るところから始めるべく、清田区内の関係者との共同事業・共同研究に関する意見交換を行った。

<sup>1</sup> 札幌市の説明によれば、「災害の危険がなくなるまで一定期間滞在し、又は災害により自宅へ戻れなくなった被災者等が一時的に滞在し、指定避難所（基幹）を補完する施設です。状況に応じて開設し、一定期間後は、指定避難所（基幹）に集約します。地区会館、高校など。」（札幌市ウェブサイト <https://www.city.sapporo.jp/kikikanri/higoro/hinan/hinanbasho.html> より。2021年4月1日閲覧）

<sup>2</sup> 平成25年度から開始した「私立大学等改革総合支援事業」は、教育及び研究面からの大学改革に組織的・体系的に取り組む私立大学等を選定し、当該大学等の財政基盤の充実を図るため、選定された大学に経常費補助金を支援するものである。

<sup>3</sup> 令和2年度は「令和2年度私立大学等改革総合支援事業調査票（タイプ1・2・3（地域連携型）・

4）」P.37に掲載（[https://www.mext.go.jp/content/20200319-mxt\\_sigakujo-100001428\\_9.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200319-mxt_sigakujo-100001428_9.pdf)

令和元年度は「令和元年度私立大学等改革総合支援事業 配点区分表（タイプ1～4）」P.35に掲載

[https://www.mext.go.jp/content/20200319-mxt\\_sigakujo-100001428\\_9.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200319-mxt_sigakujo-100001428_9.pdf)

いずれも掲載文言は同じ。

(1) 清田区市民部 総務企画課長 徳永信之助氏、同地域安全担当係長 松葉 光富氏との意見交換（2020年10月13日（火曜日））

本学出席者 地域産学連携センター長 濱田 剛一（スポーツ人間学部スポーツビジネス学科）

同 池ノ上 真一（観光学部 観光ビジネス学科）

同 佐々木 清美（観光学部 国際観光学科）

本学からは、次のように清田区に説明、要望を伝えた。

- 令和4年度には大学のカリキュラムが新しくなる予定である。その際「ボランティア」の科目を組み込みたいと考えている。学生の学びを基軸に、清田区との防災に関する連携を企画したい。
- 清田区に本学学生を加えた地域づくりとともに、大学の地域貢献の仕組みづくりを考えていきたい。
- すでに本学では清田区の住民に向けての冬季の雪かきボランティアを実施している。学生にとっても、ボランティアというのは就職活動時の評価の一つとなるが、ボランティアの「深さ」を評価される内容としたい。
- SDGs、リスクマネジメントといった形でボランティア活動ができればよい。しいていえば、学生の履歴書に書ける内容（たとえば「リスクマネジメント検定」など）がほしいところである。
- すでに本学は避難所指定をうけているものの、施錠している夜間の避難の問題や、本学含めた災害時の連絡網など、検討材料は多々ある。
- 以前地域振興課との話の中では、清田区はベッドタウンで、高齢者も少なくなく、子育て世帯も転出より転入数のほうが多い。より住みよい地域としての期待が高い。しかしながら、2018年の北海道胆振東部地震（里塚地区液状化現象）など、ネガティブな要素もある。それらを解決することと、地域貢献ができればとの内容であった。
- 文科省からの指示もあり、早急に地域全体を含めた防災マニュアルを作る必要があり、いま学園としては防災マニュアル策定中である。現行のマニュアルはあるが、それに地域を組み込むので、清田区からはアドバイスをいただきたい。

これに対し、清田区からは次のような助言をいただいた。

- ◆ 災害時のボランティア活動は、札幌市の「札幌市社会福祉協議会 ボランティア活動センター」が一元的に受け付けるというルールになっている。
- ◆ 「災害時」ということで、いつ必要になるかわからないし、もしかしたら履歴書に書く活動がないままに学生生活を終わってしまうかもしれない。定期的にやるとすれば、町内会の防災訓練の手伝いなどだろうか。
- ◆ 清田区には100の単位町内会、それをまとめる町内会連合会が5ある。防災訓練は連合町内会会長に連絡を取ることになるが、単位町内会と個別にアクセスもあり。大学所属の町内会からスタートというのも可能では。町内会を紹介することは可能である。

- ◆ 区主催の防災行事は、本年度はコロナの関係で実施していないが、2019年は土曜日に小中学校に地域住民（120名程度）を集めて実施した。実施内容は、学校内での避難スペースの区切り方やトイレの使い方など。その時には自衛隊や消防局などが参加した。これらを実施するために、広い場所、多数車を止められる駐車場が必要になる。
- ◆ 清田区の希望としては、すでにコカ・コーラやセイコーマート、日糧パンなどと災害時の協定を結んでいるが、大手だけではなく、草の根的な地元商店などの協力企業を発掘してもらいたい。
- ◆ 清田区からは、災害対応、ボランティア関連で講義を担当できる人材を紹介することは可能。  
（例：防災備蓄スペシャリスト水口綾香講師による、家庭備蓄の話）

(2) 清田中央地区町内会連合会 一関庶路氏（清田団地北町町内会所属）との意見交換（2020年12月9日）

（本学出席者：池ノ上、佐々木）

先の清田区総務企画課から紹介をうけ、清田中央地区町内会連合会 一関庶路氏との意見交換を実施した。

清田中央地区町内会連合会は清田地区の19の単位町内会・自治会からなる組織で、一関氏が居住する清田区北町町内会は本学からみて南西の方角に位置し、比較的距離も近い。一関氏は平成24年度より連合会防災防犯部長として精力的に地域の防災活動を行っている。

一関氏によると、中央地区町内会連合会及び清田団地北町町内会の活動は次の通りである。

- 中央地区町内会連合会には各単位町内会（単町）があり、各々防犯防災部長を置いている。
- 北町町内会の取り組みとしては、2011年（東日本大震災）に組織図を作成した。
- 自分では避難できない人を非難させる、AED操作、消火器操作、バケツリレー、救護など、訓練は単町ごとに行っている。
- 参加者は住民の1/3～1/4程度。2018年にやっってから2年は実施していない
- 以前大雨があったとき、区役所から避難所には1名しか派遣されなかったが、北町町内会では地域住民が手伝ってくれた。そのことで表彰されたことがある。北町町内会は比較的組織され

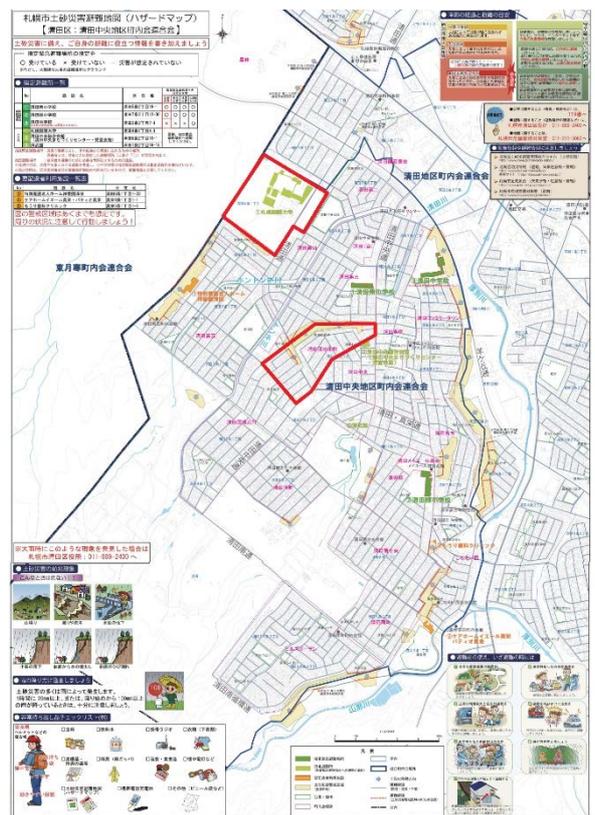


図1 札幌市土砂災害避難地図（ハザードマップ）【清田区：清田中央地区町内会連合会】

[https://www.city.sapporo.jp/kikikanri/higor-o/fuusui/documents/07-01\\_kiyotacyuuou.pdf](https://www.city.sapporo.jp/kikikanri/higor-o/fuusui/documents/07-01_kiyotacyuuou.pdf) より。赤囲みは筆者による。

ているほうだと思う。

- ▶ 防災防犯部はいざというときのための組織ではあるが、年とともに関心が薄れてきている。以前単町の組織を調査したが、世代交代が進んでいない模様。
- ▶ 大学の学生はAED、消火器放水などの訓練に参加可能。
- ▶ 大学に期待することとして、19 単町での訓練を集約し、やっていることを把握するとか、防災アンケートなど実施していただきたい。

これに対し本学は、「地域・産学連携センター」で、地域+学生の取り組みを企画していること、については「防災（仮）」をテーマに学生の力を活用する機会を設けたいとの意向を示した。

### (3) 一般社団法人地域マネジメント・アソシエイツ 代表理事戸根谷法雄氏との意見交換（2020年12月9日）（本学出席者：池ノ上、佐々木）

戸根谷氏は清田区在住で、まちづくりのコンサルタントなどを展開する一般社団法人地域マネジメント・アソシエイツの代表理事を務めるほか、リスクマネジメント協会理事、札幌学院大学経営学部での客員教授として「リスクマネジメント」の授業を担当している。「リスクマネジメント」と学生の学びを中心に話を伺った。

- 札幌学院大学では 2011 年から 2～3 年生を対象にリスクマネジメントの講義を担当している。講義を修了した学生向けに 3 日の集中講義・模擬テストの時間を設け、リスクマネジメント協会主催「リスク検定」を受験させている。
- 「リスク検定」は TOEIC と同じ点数制で 60 点以上が合格となる。授業をまじめにうけていればだいたい合格できる内容である。
- 必ずしも「防災」に限らず、企業における「情報漏洩リスク」に対する意識の向上につながるなど、「リスク認識」は今後の学生ならびに社会にとってプラスになるものである。国家資格ではないが検定を有していることで航空会社に就職が決まった学生もいる。十分就活スキルになりえるものである。
- ただ、座学だけでは意識は育たない。「リスクの洗い出し」から解決策まで PDCA を回すという「実践」が必要である。地元と連携することでそれは可能ではないか。
- 清田区在住で「清田区地域防災計画」の講師を務めていることから、町内会と連携した「講義」を実施するのもやぶさかではない。

## 2. プロジェクトのまとめ

令和 2 年度は新型コロナウイルスの感染防止の観点から、さしたる活動ができないうちに終えてしまったが、清田区や町内会との意見交換の中では本学との協働に前向きな姿勢がうかがえた。地震や豪雨による災害の恐ろしさを肌身で感じている住民が組織として活動しているなかで、本学学生の協力が期待されていることから、本学の新たなカリキュラム策定を含む、令和 4 年度にむけた本学の活動方針の策定と地域に対する意思表示を進めていきたいところである。

### 5-3. 「観光による地域課題解決プロジェクト」の実施概要

#### 1. プロジェクトの概要

地域課題解決に向けた観光まちづくりを進めていくためには、観光に関する地域情報を誰が誰に対して、どのように発信できるかの可能性について検討することが必要であろう。その際、コロナ禍により拡がりつつある Zoom 等のリモートによる観光ツアーや、人や地域間をつなげる会議等のシステムの構築を見据えながら、グローバルな視点からホスピタリティマネジメントに関する人材育成プログラム等の開発の可能性も今後、検討する予定である。そして、地域・本学ともに Win-Win の関係となる地学協働を目指し、持続可能な仕組の構築を目指した。

事業期間は、まずは3カ年を想定し、1年目である今年度は、主な1つ目として縄文文化や地域に関して理解をするために「地方創生カレッジ in 函館 アドバンス編」への参画、2つ目には「地方自治体又は地元産業界等との連携による地域課題の解決を目的」として、「北海道・北東北の縄文遺跡群を旅するガイド」の作成のための、制作委員としてガイドブックの企画立案などに携わった。

#### 2. 「地方創生カレッジ in 函館 アドバンス編」への参画

日時：2020年11月28日(土)、29日(日)の2日間開催され、29日(日)のみ参加

主催：公益財団法人 日本生産性本部

事務局：一般社団法人 地域マネジメント・アソシエイツ

この事業は、2019年度実施された「地方創生カレッジ in 函館」のアドバンス編として、2021年度に世界文化遺産への登録を目指している縄文 DOHNAN プロジェクトの取り組みに重点的に対応されており、世界遺産登録とまちづくりをテーマとしている。

【1日目】は、函館市縄文文化交流センターと垣ノ島遺跡の現地視察が行われた。

#### 【2日目】

日時：2020年11月29日(日) 13:00~18:00

場所：セッション会場：函館市地域交流まちづくりセンター（函館市末広町4-19）

方法：※オンラインによるライブ配信

参加者：札幌国際大学 池ノ上 田村、観光ビジネス学科 3年2名

# はこだてまちづくり

## 『北の縄文から始める一万年のストーリー』

2019年度実施された「地方創生カレッジin函館」においては、10チーム・5テーマ毎に167名の受講者の参加を得て、エリアマネジメントに視点をおいた様々なまちづくりのアイデアが生まれました。この中から2021年度に世界文化遺産への登録を目指している背景や活動の熟度を踏まえ、本年度は「世界文化遺産登録とまちづくり」をテーマに「地方創生カレッジin函館」アドバンス編を実施します。

現地視察、基調講演、パネルディスカッション、ワークショップを通して関心をもとめ、内外に発信していきたいと思えます。

昨年度の「地方創生カレッジin函館」に参加された皆さんはもとより、「エリアマネジメント」、「世界文化遺産登録」に関心のある皆さんの参加を期待しています。

### 《 地方創生カレッジin函館 アドバンス編 》

◆ 第1日目

14:00 現地視察 函館縄文文化交流センター（事前申し込み）

◆ 第2日目

13:00 開催挨拶 公益財団法人 日本生産性本部

13:10 主題解説 太田 清澄氏  
(日本都市計画学会アドバイザー会議委員、札幌学院大学名誉教授)

13:30 基調講演 島津 忠裕氏 (島津興業代表取締役社長)

『世界文化遺産への道のりと課題および新しいデザインのまちづくり』

15:45 パネルディスカッション

◆ パネリスト(予定)

島津 忠裕氏 (前掲)

阿部 千春氏 (北海道環境生活部文化局文化振興課世界遺産推進室・特別研究員)  
(一般財団法人道南歴史文化振興財団理事)

境 勝剛氏 (函館商工会議所副会頭、道南縄文文化推進協議会会長)  
(一般財団法人道南歴史文化振興財団理事長)

山田かおり氏 (縄文DOHMAN プロジェクト代表)

◆ コメンテーター

太田 清澄氏 (前掲)

長谷山 裕一氏 (函館市教育委員会文化財課長、世界遺産登録推進室次長)

◆ コーディネーター

池ノ上 真一氏 (札幌国際大学教授、一般財団法人道南歴史文化振興財団理事)

16:45 質疑応答

17:00 ワークショップ (提言書取り纏め)

18:30 閉会

◆ 現地視察・意見交換会(事前申し込み)

11/28 (土) 14時～

函館市縄文文化交流センター  
函館市白尻町551-1

◆ セッション(事前申し込み)

11/29 (日) 13時～

函館市地域交流まちづくりセンター  
函館市米広町4-19

参加者募集(無料) 定員 50名

◆ 基調講演

『世界文化遺産への道のりと課題および新しいデザインのまちづくり』

島津 忠裕氏

株式会社島津興業・代表取締役社長  
島津家・33代目 (西郷隆盛・玄孫)

(下記担当者へ電話またはメールにてご連絡ください。)

◆ 参加お申込  
「地方創生カレッジin函館」事務局担当者：山田  
電話：070-3844-9265 メール：rere.hakodate.college@gmail.com

◆ 参加にあたって

1. 「地方創生カレッジ」の指定講座をオンラインにて事前受講をお願いします。
2. 新型コロナウイルス感染予防対策にご協力をお願いします。

① マスク着用、アルコール消毒、発熱・体調不良者の入場制限、ソーシャルディスタンス  
② 新型コロナウイルス接触確認アプリ(COCOA)や北海道コロナ通知システムの活用

主権：公益財団法人 日本生産性本部  
事務局：一般社団法人 地域マネジメント・アソシエイツ

フォーラムでは、地方自治体又は地元産業界等と協働して、池ノ上はファシリテーターとして、田村、学生は当日の運営に関わり、世界遺産登録後のまちづくりに関しての基調講演や様々な分野の方々の意見交換などにより、北海道・北東北の縄文文化や地域に関して理解と学びを深めた。



【記録映像】地方創生カレッジin函館 アドバンス編 ※ダイジェスト  
(URL: <https://www.youtube.com/watch?v=RjRRCsOq9oQ>)

2日目はコロナ感染予防の対策として、急遽開催方法をZoomへ変更し、関係者のみが会場にて基調講演、パネルディスカッション、ワークショップを行い、ライブ配信を実施した。多くの参加者がZoomにて視聴し、意見・感想等が寄せられていた。

このフォーラムでは、函館市の自治体や商工会議所、地元産業界等と北海道・北東北の縄文文化や世界遺産登録後のまちづくりに関して先進事例紹介やディスカッション等を通じて、今後の函館市・道南地域において地域の特性や観光資源を発信・活用しながら、ネットワークを活かした地域づくりを考える貴重な機会となった。

### 3. 「北海道・北東北の縄文遺跡群を旅するガイド」制作プロジェクトへの参画

新型コロナウイルス感染症拡大により地域は大きな影響を受けており、自由に旅や交流ができない状況が続いている一方、長年にわたる関係者の努力で「北海道・北東北の縄文遺跡群」が2021年7月の世界遺産登録を目指している。

この機会をビックチャンスと捉え、全国の多くの人々に縄文に興味をもってもらい、北海道・北東北に実際に足を運んでいただくきっかけづくりとして今何ができるかを考え、2020年12月に本学を含む「北海道・北東北の縄文遺跡群を旅するガイド制作委員会」を結成し、「北海道・北東北の縄文遺跡群を旅するガイド」の制作にあたることとなった。

このプロジェクトの特徴は、北海道・北東北の縄文文化や地域の魅力を「観光を学ぶ学生」×「地域の有志」×「出版社」などが一緒に制作することにより、学生への地域社会の学びの機会の提供及び地域貢献へと繋げることに意義があると考えられる。

●観光を学ぶ学生（札幌商工会議所附属専門学校、札幌国際大学、北海道教育大学函館校）

●北海道・北東北地域の縄文を愛する地域の有志

●旅や地図の情報を扱う専門の出版社（株式会社昭文社）

実施主体は、以下の予定である。

編集委員：札幌商工会議所附属専門学校（福森星嗣、若山紗世、学生）

札幌国際大学（池ノ上真一、田村こずえ、渡井瞳、学生）

北海道教育大学函館校（奥平理、古地順一郎、学生）、昭文社（茂呂真理）

サイト委員：石井智之、境勝則、佐藤綾子、佐藤雄生、島康子、嶋田浩彦、杉本夏子、

To.t（たあと）、三津谷あゆみ、山田かおり

監修：岡田康博、阿部千春、越田賢一郎（本学人文学部教授兼縄文世界遺産研究室長）、福田友之、戎谷侑男

共催：北の縄文道民会議、札幌商工会議所、縄文 DOHNAN プロジェクト、

伊達洞爺湖ミュージアム地域振興プラットフォーム、津軽海峡マグロ女子会、

道南歴史文化振興財団、道南縄文文化推進協議会、北海道遺産協議会(予定)、ドニワ部

協力予定：伊達市、洞爺湖町、函館市教育委員会、八戸市教育委員会、北海道博物館

※上記は2021年2月10日現在（五十音順、敬称略）

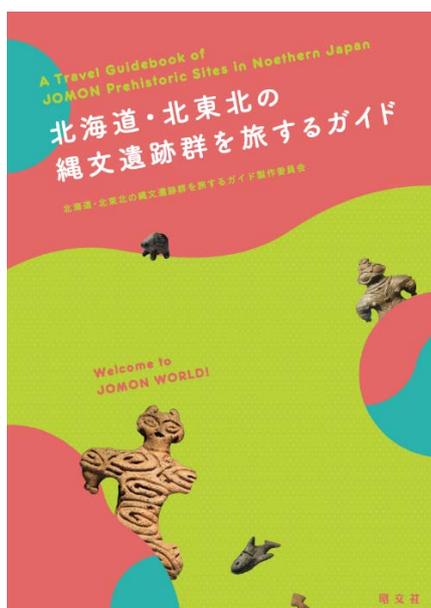
### 【ガイドブックのコンセプト】

- 目的 “縄文”に触れ、地域と旅行者をつなぐ
- 誰が 学生×地域×昭文社による制作委員会
- 誰に 全国のみなさん
- どのように “縄文”のすばらしさについて、ガイドブックをとおして伝える
- いつ 2021年7月頃（世界遺産登録予定）に出版予定
- 概要 A5版、96ページ、販売予定価格：1,300円 印刷部数：8,000部

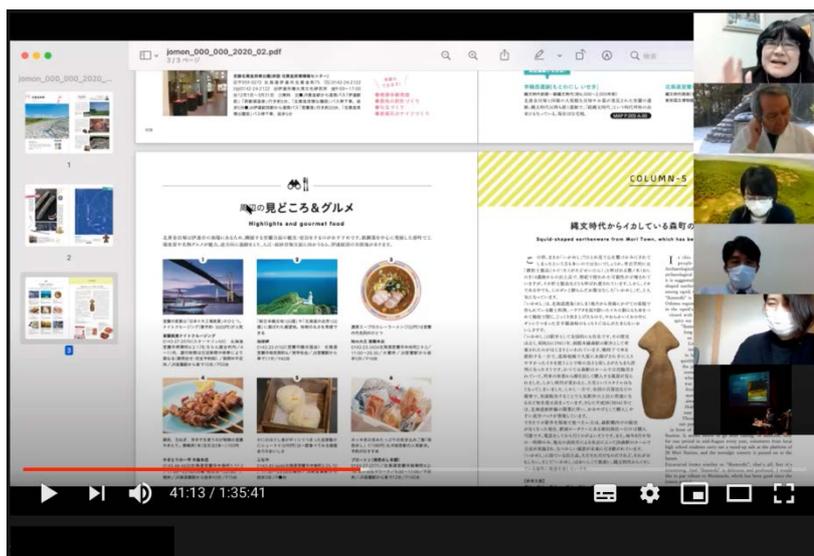
### 【制作するガイド本の内容】

北海道・北東北の縄文を、熱く！わかりやすく！紐解く

- ▶学芸員さんの協力のもと 各遺跡の魅力やチェックポイントをわかりやすく解説
- ▶土偶や土器など、アートを感じさせるキュートでユニークな出土品の紹介
- ▶楽しい旅をサポート！周辺のグルメ、グッズ、体験などの観光情報もしっかり掲載
- ▶縄文にまつわる面白い情報や、地域の方々の熱い取組をコラムなどで深掘りして紹介



ガイドブックの表紙のイメージ



定例会の様子

「北海道・北東北の縄文遺跡群を旅するガイド制作委員会」のメンバーにより、下記の日程にて定期的に打ち合わせを行い、東京や東北、そして北海道の関係者が「北海道・北東北の縄文遺跡群を旅するガイド」の制作に向けて、コロナ禍においても意見交換や事業の進捗状況などの確認を行った。

- 第1回 2021年2月3日(水)、第2回 2021年2月10日(水)、第3回 2021年2月17日(水)、
- 第4回 2021年2月24日(水)、第5回 2021年3月3日(水)、第6回 2021年3月17日(水)

#### 4. プロジェクトのまとめ

2020年度は、ガイドブックの企画・立案・掲載内容の検討を行い、出版に向けて準備を行った。2021年度は、学生がガイドブックの制作に関わり、地域の資源を発掘し発信していく学びの場として展開していく予定である。学生が参画してガイドブックを作成するにあたり、北海道・北東北の縄文文化や地域の魅力の発信過程に関して地域に出向き、実際にインタビューや取材することにより、社会性を身につける場の提供となるであろう。

また、観光ルートの作成などを通じて、地域資源を広域的な観点から捉え、新たな観光資源のとなり、地域や産業界と連携をして地域貢献につながることを期待する。

最後に本学の縄文世界遺産研究室 越田室長、渡井研究員の縄文文化に関する専門的な知見からガイドブックを監修及び執筆する予定となっており、ガイドブック作成にあたり本学の果たす意義は大きいと考える。

今後、北東北・北海道が2021年7月の世界遺産登録を目指している「北海道・北東北の縄文遺跡群」という観光資源を学生などの若い世代から情報発信することにより、学生と地域の交流が生まれ、地域の魅力の高め、地域課題の解決に向けた実践的な研究となり、学生の学びの場としての仕組みづくりになるように検討していく予定である。

令和2年度 札幌国際大学 地域・産学連携センター共同研究費  
一般社団法人北海道商工会議所連合会との人材育成に関する産学連携プロジェクト報告書  
～早期の企業訪問による、就業・キャリア意識向上についての研究～

札幌国際大学 原一将

札幌国際大学短期大学部 小林純、石田麻英子

連携共同研究先 一般社団法人北海道商工会議所（道商連）

## 1 はじめに

本研究は、一般社団法人北海道商工会議所連合会（以下、道商連）と札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部（以下、本学）が2015（平成27）年から継続している連携協定によるものである。

連携協定は「北海道における人材育成」をテーマとして、学生またはその養成機関である大学、また人材の受け皿になる企業、特に北海道に多数存在する中小企業というステークホルダーそれぞれが、どのような意識を持ち就職・採用活動を実施しているのかを調査して、双方のメリットとなる「就職活動のあり方」や「人材の育て方」を検討・考察することを目的としている。

これまで、就職活動といえば、学生側は個々の興味・関心によって企業を選び、受験するという就職先重視の考え方が主流となっていたが、近年は職業の安定性や住環境、また自分自身の生活の暮らしやすさ QoL を求める声も大きくなっており、「仕事より家庭・プライベートを優先したい若者が増加」（総務省2019）していることから、もはや社員の希望を企業も無視できない状況となっている。さらにコロナ禍において企業選択のポイントも変化している。マイナビ2022年卒大学生就職意識調査によると、就職での企業選択の条件として最も多かった答えは「安定している会社」で42.8%、前年より4.5ポイント増加し、現在の形で調査を始めた2001年以降最も高い割合となっている。

一方で、「人手不足」が叫ばれる企業としても、福利厚生の実施や、職制改革などで人材の確保に動いているものの、全国規模で事業を行う一部の大手企業を除く、一般の中小企業では、採用はもちろん、募集活動にすら困難を来している企業も少なくない。特にいわゆる地方都市の企業については、事業内容だけでなく、給与や住環境などの面から学生が目を向けず、比較対象にすらならない状況が続く。

学生と中小企業をつなげる「マッチング」の考え方は以前からあるものの、学生の大企業志向、また教育機関である大学自身も（入学募集にも影響あるためか）大手企業の受験を勧めており、中小企業は二の次になっていた面は否めない。また企業側も教育の高度化、大学進学率の向上が進む中で、募集・採用活動の評価軸をどこに設定すべきか、試行錯誤していることが推察できる。

本学では、開学以来、初年次からのキャリア教育を重視して「自分の将来像を描く」ことができるよう、学生への就業指導を進めている。昨年度からは学内に全学共通教育部を新設、

そのなかにキャリア教育部門を置き、キャリア教育のさらなる強化を展開中である。しかし、教育機関として限られた空間での学びは、実際の社会を創造させるには心許なく、(キャリア教育に限らず)それぞれの講義では、さまざまなフィールドワークや外部講師の招聘をもって、「実際の社会を感じる」環境を授業内に取り込んできた。これは、社会を知るのであれば、社会の構成員と実際に会い、語り、理解することが必要だからであろう。大学が社会へ人材を送り出す基盤として求められている以上、机上の空論だけでなく、実践による体験を学生に要求することは当然である。

しかしながら、大学は研究機関という性格上、専門的な人材の養成に特化することが多く、いわゆる“普通の大人”との接触は、限定的な場、例えばアルバイトや社会人サークルなどしかない。そしてこれが、社会との結節点である大学を卒業した後、突如「社会人」として生活しなければならない学生に、社会にでることへの不安や忌避感をもたらしているのではないか—というのが、本研究の出発点である。

まず、近年話題に挙がることの多い三年以内の離職率の増加や、社会生活の不応の増加などは、晩婚化や核家族化の進展に伴い、身の回りの“大人”との接触が減少し、実社会を知る機会そのものが失われつつあり、就労や社会人としての生活を想像することが難しくなることが原因の一つであり、インターネット上の情報やドラマなどに代表される「作られた社会」をベースに自分のキャリアを形成せざるを得ないのではないだろうか、と予測した。

中小企業への就職という選択肢についても同様のことがいえると考える。これまで労働力の大半であった地元高校生が、大都市の大学へと進学することが多くなったことで、若者は地元中小企業で働く生活を想像できなくなっている。より良い人材の確保のためには都市部から地方に目を向ける学生を増やすため、企業側は広範囲に採用活動を広げる必要が出てきた。しかし、これまでそういった採用活動の必要がなかった中小の企業では、採用活動のコスト増加や活動自体に慣れていないことから、人材の確保が困難になり、事業継続に影響が出る企業も見られる。また、高学歴化が進むことで、待遇の改善を求められ、人件費が増加した結果、地方企業は疲弊しつつある。

学生が給与だけでなく、プライベートの充実を求める傾向がある中で、人件費から見れば大都市・大企業にハンデがある地方企業は、人材確保の考え方として、本来であれば充実した社会生活を“売り”にすることもできるはずである。しかしながら、このような形で採用活動を行う企業は少ないのが実情であり、もし実現したとしても、大都市型の利便性の高い生活しか知らない学生に、地方都市での生活の利点を想像させることができるか、という点で課題が残ることとなる。

学生と企業の双方が、現在の社会様式や意識、就職活動に、互いに異なった考えを持つことにより、ミスマッチが発生し、早期離職、雇用のアンバランスといった問題が起こる。それであるならば、この二者が相互に理解し合うことが、最も重要なことであるといえる。そこで、本研究に於いては「早期から企業訪問や社会人との接点を増やすことで、学生の就業・キャリア意識を向上させることができる」との仮説を立て、授業や課外活動の場で、学生と

企業が接する機会を設定し、双方の意識の変化を引き起こすことができるか、またその変化によって行動が変化するかを測定することで、就業に関わるミスマッチを減少させることを目的に研究を進めてきた。

これらの研究成果は、大学に於いてはキャリア教育やカリキュラム編成の構築に役立てられる他、就業支援活動に直結するものである。さらに企業においても、学生が就業前に考えている仕事への期待や不安、将来の生活に向けた考えなどを知る機会となり、採用活動のみならず、新卒社員の育成やコーチング活動の一助となることを期待するものである。

## 2 これまでの研究活動の概要

本研究活動は 2015（平成 27）年に、道商連と本学が産学連携協定を締結し、札幌国際大学奨励研究として、学生の就業観や意識の調査などを行ったことからスタートしており、先述のように今年度の調査活動で 6 年目を迎える。これまでの研究活動の概要は以下の通りである。

### ● 2015（平成 27）年度

学生の就業への意識、また地域の中小企業への就業可能性について検討することを目的としたアンケートを、札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部の全学生を対象に実施した。また、社会人との接点を増やすことを目的とした講師招聘型の「社会人講座」をスポーツ人間学部の学生向けに実施した。

### ● 2016（平成 28）年度

前年を踏襲しながらも、昨年とは逆に地域の企業に向けたアンケート調査を実施した。これは北海道の商工会議所に所属する企業から規模別、地域別に企業を選抜し、採用活動の課題や、新入社員養成における支援などを問うたものである。社会人講座も引き続き行われた。

### ● 2017（平成 29）年度

この年は短大に注目し、研究代表者も短大教員が担当した。アンケートなどの定量的調査は行っていないものの、社会人講座をより強化し、四大生だけでなく、短大生も参加し、また社会人講座は地方中小企業の若手経営者（またはそれに準ずる方）をお呼びした。さらに、講座に招聘した企業を学生が訪問し、企業のある地方都市の様子や、実際の仕事の現場を自分の目で確認することを目的とした、企業訪問活動を行った。

### ● 2018（平成 30）年度

前年度に行った企業訪問が企業から好評であったことや、道商連からも関心が高かったことから、テーマを持って訪問企業を選定する企画を行った。この年度のテーマは「地方創生」、札幌から遠く離れた小規模都市の企業を訪問することを検討した。これは大都市中心への就職希望が多い学生に向けたアンチテーゼであり、自分が求める生活が本当に大都市でなければ叶わないのか、を検討してもらうための企画でもあった。本年度は当初から社会人講座と企業訪問を連動させることを決めており、講師の選定段階から企業訪問への協力

や最終発表会への参加を求めるなど、本研究活動の形式が定まった、ともいえる。

#### ●2019年（令和元年度）

前年度の「地方都市重視」をさらに進めて、地域の商工会議所との連携を強化する活動を行った。各市町村には商工会議所（や商工会）が存在するが、今回あらためてテーマとして取り上げた理由の一つに、全ての商工会議所の活動が均一ではないことが挙げられる。活発に活動している商工会議所もあれば、目立つ活動に消極的な商工会議所もある。この年は道商連が推薦する、比較的活発な商工会議所とタイアップし、複数の若手経営者との懇談会などを企画した。この活動が、結果的に本研究のターニングポイントとなった。

なお、これまでの研究活動の詳細については、それぞれの年度の研究活動報告書、また研究成果をまとめた実施報告・研究発表等を参照されたい。

昨年度はコロナ禍の影響で、例年3月に開催している成果報告会が実施できず、参加学生も発表の場を失ってしまったが、今年度は社会人講座～企業訪問～成果報告会という一連の流れを完結することができた。

### 3 今年度の事業活動内容

#### 3-1 活動に向けた企画

2019年度の活動が終わった段階で2020年度の企画はある程度決定しており、中心テーマとなるべきものが検討されていた。それは「商工会議所青年部」である。商工会議所には青年部という組織があり、名称のとおり若手会員で構成されている、商工会議所の下部組織という位置づけである。年齢構成はまちまちであるが、多くの商工会議所では満50歳になったら退部するという決まりがある。現在、北海道商工会議所連合会青年部の会長を務めているのが、2019年の社会人講座に参加していただいた、株式会社空間工房（本社：滝川市）の代表取締役社長である中嶋隆氏である。

2019年度の活動において、浦河商工会議所の青年部と企画された研究会・懇談会は、若手経営者の地域活性化を視野に入れた経営のあり方や、地元にかける思いを学生にダイレクトに伝えられただけでなく、学生が考える就職への想いや働き方、日常の生活を学生自身の視点から意見交換することができた。この企画は、経営者、学生、商工会議所のそれぞれに好評であったこと、学生が若手経営者を見ることで将来像をより描きやすいであろうという理由から、2020年度は「青年部」をキーワードとし、若手経営者の情熱を直接学生にぶつけていただき、その熱量を学生に感じてもらうことをメインテーマとした。「社会人講座に招聘した企業を訪問する」という形式は変えず、ともすれば社会科見学になりがちな企業訪問ではなく、そこで働く社会人、若手経営者との交流という側面に重き、企業選定もそれに準じた内容で道商連と検討を行った結果、今年度の協力企業は以下の3社に決定した。

株式会社空間工房

（滝川市） 建設業（建築工事業）

三共建具工業株式会社 (砂川市) 建設業 (建具工事業)  
三笠精算事務所パートナー保険サービス (岩見沢市) 金融業 (保険業)

今年度の社会人講座は、札幌の感染者増加をうけ、Zoom を利用しオンラインで行うこととなった。企業紹介ではなく、社会人としての生活や仕事への取り組み方などが話題の中心であったことが学生を惹きつけたようで、登壇者のキャラクターやライフヒストリーが学生たちにとって大変興味深かったことが、学生が書いたリアクションシートから読み取れた。このような企画の成否は、人選が大きなカギを握っていると改めて感じさせられた。写真は、学内遠隔授業配信スペースからの配信の様子と、ディスカッション中のスクリーンショット。企業にできるだけ負担をかけないため、語っていただく以外の操作は全て教員でコントロールを行った。



また今年、企業訪問時には、岩見沢商工会議所に招聘され、岩見沢商工会議所青年部の若手経営者との研究会に学生が参加し、そこで訪問先以外の複数の企業の方とも接することができた。

### 3-2 社会人講座

社会人講座は、本研究活動を開始した 2015 (平成 27) 年から継続して行われており、今年度が 6 回目の開催であった。本講座は、企業の経営者・重役を大学に招聘し、学生に直接講話をいただくもので、今年度は先述の協力企業に参加を依頼した。

今年度のテーマは「社会人の生活とはどのようなものか～就職から地方での生活を選ぶまで」「中小企業の仕事の取り組み方」であった。これらの話題を中心に講演いただき、極力、自社の紹介は避けてもらうことを例年通り依頼した。

講座の実施に当たっては、授業の一環として企画し、本研究に関わる教員の担当授業 1 講分 (必修科目) を充て、多くの学生の参加を促している。学生は就職・キャリアに関わる活動をする中、人事担当者の話を聞く機会が多いものの、そうではない社会人、しかも企業の経営に関わる人材から直接話を聞く機会はその多くはない。先入観から、最初は聞き流すような態度をとっていても、徐々に「いつも聞く話とは何かが違う」と気づき、次第に真剣な眼差しで話に聞き入るようになる学生たちの様子が例年見られる。

2020 年度 of 社会人講座の開催については、早期からオンライン開催を検討した。大学では春学期よりオンラインでの授業が行われており、受講者、教員の機器操作や環境整備は問

題なかったが、企業側は必ずしも準備ができていた状況とはいえないため、事前の打ち合わせを入念に実施した。オンライン元年とも言われた同年ではあるが、大企業ではともかく、地方の中小企業では、自社事務所のインターネット回線契約もままならない状況であることも、盛んに報道されている。そのため、回線トラブルや操作ミスなどのアクシデントも危惧していたものの、特に大きな混乱もなく終えることができた。

これまでの社会人講座では、各講師が単独で講義を行うスタイルで、学生をグループに分けて小教室に配置し、講師に教室を回って何度か同じ話をさせていただく形で実施していたが、今期は講師人数が少ないことと、オンライン開催であったことから、ファシリテーターである教員がリードし、全講師でディスカッションをさせていただく形式で実施した。

登壇者の経歴や業務内容、またプライベートでの趣味や社会活動など、話題は多方面におよび、学生の興味・関心を引いていた。また、昨今は自分の身の回りしか知らない学生も多く、出身地でもなければ、地方都市の様子はおろか、都市の位置さえ知らない学生もいる。しかし今回の社会人講座で、自分の知らない地方都市にいるアグレッシブな社会人、会社経営者を知り、かなりの刺激を受けたことが、受講後のリアクションシート（Forms）に良く表れていた。

また、今回の講座では、各講師からの話の前に、共同研究者である道商連から、各地にある商工会議所の紹介とその役割を説明する時間を設けた。学生も耳にすることはある「商工会議所」がそもそも何をしているものなのかを考えてもらい、企業が地域でどのような役割を果たしているのか、また企業同士が連携することで、その土地の課題解決にどれほど大きな役割を果たしているのかを知ってもらうためであった。

日程の都合上、スポーツ人間学部 2 年次生 100 名、短期大学部総合生活キャリア学科 1 年次生 45 名のみを対象とせざるを得ず、全学を対象とできなかったことは残念であったが、受講者は経営者の思考や社会人の就業観について生き生きとしたイメージをつかむことができたようであった。

日 程：2020（令和 2 年）11 月 25 日（水）13：00～14：30

場 所：オンライン

授 業 名：スポーツ人間学部「キャリアデザインⅡ」内、  
総合生活キャリア学科「基本演習」内で実施

講 師：株式会社空間工房（滝川市） 代表取締役社長 中嶋 隆 氏

三共建具工業株式会社（砂川市） 専務取締役 水島 聖一 氏

三笠精算事務所パートナー保険サービス（岩見沢市）代表取締役社長  
越前 良太 氏

実施方法：オンライン開催とし、授業冒頭イントロダクションの後、北海道商工会議所連合会から「ホワッツ会議所・ホワッツ青年部」と題した組織の説明をさせていただき、その後、ファシリテーターである教員と登壇者とのディスカッションを実施。授業終了後はリアクションペーパー（Forms）を回収した。

### 3-3 社会人講座の効果と実施状況

講座実施回の前週には、学生に各企業の Web サイトを印刷したものを送信し、適宜必要なことを調査し、質問を考えておくよう指示を出した。その際、企業説明会とは異なることや、社会人としての行動に関心を持って質問をしてほしい旨を説明した。

当日は、参加講師陣に再度趣旨を説明し、こちらも単なる企業説明にならないように、またできるだけ各地域の情報を提供していただきたい、ということ传达了。今回はファシリテーターとして教員が進行を務めるため、できる限りそれを念頭においた進行を心がけた。

授業終了後は、短大生・四大生ともに課題として、聴講した講話への感想とお礼を記入・提出することを義務づけており、その内容は道商連を通じ、各企業へと送付している。昨年度までは、学生の感想は、講師の「仕事に対する姿勢」に関するものが多かったが、今年度はファシリテーターが経営者の日常に大きくフォーカスしたこともあり、「経営者としての日常」や「プライベートでの生活」について多くの感想が寄せられた。特に、「働く理由がお金がほしいでよいのか？」という疑問に対して、「稼ぐことができ自分の生活を豊かにすることが仕事の原動力になっている」という講師の声は、学生に大きく響いたようである。

働く、ということがさまざまな形で定義される現代ではあるが、仕事のやりがいや社会貢献という言葉に翻弄され、自身を犠牲にし、健康な生活が困難な環境でも働かなければならない、という義務感を学生が持つてしまうことが、いわゆる「ブラックな労働環境」という社会問題を生んでいるのであれば、本末転倒である。講師のわかりやすいメッセージが学生に届いたのは、そのような葛藤を和らげることへとつながったのだろうと推察できる。

また、仕事と同じくらいプライベートの充実が必要という講師の意見には、学生から大きな共感の反応があった。家族との時間や自分の趣味のために、仕事を全力で行うスタイルは、アルバイトがプライベートの一部となっている現代の学生にとって、働くことの意味をもう一度考える機会になったようである。

社会人講座は、学生の「なぜ働かなければならないのか」「働くことは苦しいことではないのか」という疑問や不安に対し、ヒントを与えられる重要な機会であり、今後も継続して行われることを期待する。それゆえ、全学的なキャリア教育の一環として、より対象者の幅を広げていくことが重要であると考えている。

### 3-4 企業訪問

企業訪問は、2017（平成 29）年度より本研究に取り入れた活動である。社会人講座は、学生が社会人と語り合う「場」としての機能を期待して行われているが、対象となる学生からすると「1 対多」での“講義”であることには変わらず、また講師がリアルな説明を行っても、聴講だけでは実感として乏しいという弱点があった。そこで、社会人講座に招聘した講師所属の企業にご協力いただき、講座後、有志の学生（と引率教員）が企業の業務現場を訪問し、現地の社員と懇談を行うことを目的とした“企業訪問”を実施してきた。

今年度は 2021 年 2 月に 2 回の日程で、滝川、砂川、岩見沢の企業を訪問した。コロナ

禍ということもあり、宿泊は避け、大学の公用車を使用し、両日日帰りで行った。

訪問前に参加学生を集め、各訪問日ごとに事前ミーティング（企業訪問への参加動機の共有、自己紹介ボードの作成、ホームページを見ての訪問企業研究、質問項目についての整理など）の機会を設けるのは、例年と同様に、対面で行った。

この企業訪問は、会社の詳細な説明を求めてするのではなく、学生自身のキャリア意識、就業観から来る社会人への疑問・不安の解決を重視している。社会人から、仕事の現場で直接話を聞ける機会であることに惹かれて、また、知らない地方都市を訪問し、視野を広げる機会として、“経験値を上げる”ために参加するという学生たちの意思を確認する。口頭だけでは、訪問先で記憶に残らないことから、毎年自己紹介用ボードを作製し、このボードを見せながらプレゼンテーションのように自己紹介をしてもらい、訪問先でも自分のそばに立てておくようにしてきた。



写真は話し合いの様子と、自己紹介の練習のようす。

#### 3-4-1 株式会社空間工房（滝川市）訪問日：2021（令和3）年2月25日

滝川市は、北海道中部（道央地方）に位置し、空知総合振興局に属する市であり、中空知地域の中心都市として発展している。しかし郊外のロードサイド店が相次いで造られたため、中心市街地の衰退が進んでおり娯楽施設はあまりない。かつて、NHK朝の連続テレビ小説「チョッちゃん」の舞台として有名になった。近年では石狩川河川敷にグライダー飛行場を建設し、グライダーによる町おこしが行われている。

学生たちは、空知地方の雪の多さにまず驚いていた。高速道路が途中で通行止めとなり、道中ほぼ雪の壁しかない景色が続いたが、訪問先に近づくにつれて、見慣れた大型店舗が複数目に入るようになってくると、学生たちは「思ったよりなんでもある」という感想を抱いたようだった。

空間工房の事務所は、事務所というよりも「家」といった感じで、かなりくつろいだ雰囲気の中、中嶋社長の軽妙なトークと壁を作らない人柄の温かさに、学生たちはすぐに引き込まれ、気軽に質問ができるようになっていた。学生たちは、転職という話題にかなり興味をもち、今までではいけないことのように感じていた意識が変わったという。また、人と

のつながりを大切にすることについて、また一人の人間として評価してもらえる人材になることに対し、あらためて重要であるという実感を持ったと口々に話していた。



### 3-4-2 三共建具工業株式会社（砂川市）訪問日：：2021（令和3）年2月25日

砂川市は、旧産炭地域である空知地方に位置する人口 1.6 万人の小規模な都市である。「日本一の直線道路」として有名な国道 12 号が市内を貫き、交通の往来は多いものの、主要都市機能は隣接する滝川市などに集中しており、人口の減少が続いている。一方で、街の緑化に力を入れており、人口あたりの都市公園面積は全国一（2006 年）である。また、北海道を代表する企業が本社や工場を構えており（株式会社ホリ、株式会社北菓楼、ソメスサドル株式会社砂川工場など）、市内には菓子店が多いことから、「スイーツロード」の名称を国道 12 号の愛称として使用している。

昨年度も訪問させていただいた先であり、また、小・中・高校生の見学も何度も受け入れている先であるため、受け入れ側も慣れたようすであった。学生たちが興味を持つように、学生にとって身近な話題にも触れつつ、砂川という土地と会社の仕事について解説いただいた。工場での解説であったため、目で見て、音を聞き、においを感じて、実際に触りながら、職人の技術の高さや、それを追求する姿勢を学ぶこととなった。機械化されている部分もかなりあることを、実際の作業を見せていただきながら教えていただいたが、仕上げはやはり人の手で行うこと、機械の使い方にも細かい技術がいることを知り、感動しきりであった。鉋をかける体験をゲーム形式で行っていただき、楽しくその難しさを実感した学生たち

は、中小企業の技術力の高さにあらためて感動し、その技術で大手には作れないものを作っていけば、高く評価され、それがさらにまた仕事に繋がるということを実感できたようであった。



### 3-4-3 株式会社三笠精算事務所パートナー保険サービス（岩見沢市）

訪問日：2021（令和3）年2月26日

岩見沢市は、北海道中部（道央地方）の市であり、空知総合振興局の振興局所在地である。人口は5万人ほどであるが、北海道内における陸上交通の要衝の一つであり、とりわけ高度経済成長期には近隣の炭鉱と北海道各地の港湾都市とを結ぶ列車の一大拠点となっていたことから、旧国鉄が全国12か所の鉄道の町の一つとして公認していた経緯がある。また、日本有数の豪雪地帯であり、国から特別豪雪地帯の指定を受けている。1シーズンで累計8メートル近い降雪量がある。

今シーズンにおいては、岩見沢市を中心とした空知地域は「雪害」とも言うべき度重なる大量の積雪があり、訪問当日も吹雪模様で、高速道路が通行禁止、道路の視界がゼロになる厳しい天候となった。

やっとのことでたどり着いた事務所にある打合せスペースにてお話を伺った。事務所内の雰囲気は「職場」という言葉で想像する、最も典型的な姿だと、学生が話している。お話を伺っている間にも、周りではそれぞれのデスクで、従業員がそれぞれに業務を行っており、途中、社長から従業員の方にお話をふってくださる場面も見られる、アットホームな雰囲気が感じられた。小学生に向けて職業講話をされた際に使われたスライドを見せていただき

ながら、「保険」というものを扱う仕事について詳しく伺った。普段車に乗る機会の多い学生たちは特に、実感を持って、積極的に質問をしていた。もともと業界に興味を持っていた学生もいたため、かなり話が弾んでいた。

ご自身が最近事故に遭われたお話なども交えつつ、一社会人としての生活を絡めた仕事のお話、また、自社の仕事が地域、地域の方の暮らしとどれくらい深くかかわっていると考えているかを伺って、また異なる仕事の側面に触れた学生たちであった。



#### 3-4-4 岩見沢商工会議所青年部交流会（有明交流プラザ）

本来なら三笠精算事務所パートナー保険サービスから、車で10分もかからないはずの岩見沢駅であるが、大雪の影響で除雪がいたるところで行われており、倍の時間がかかってしまった。都市部でもそうでなくても、雪の多い地域は厳しいかもしれない、と、学生たちは感じていたようである。

駅併設の有明交流プラザ2Fの会議室で、商工会議所青年部の方々が、交流会の準備を行ってくださっていた。訪問を繰り返して、大人と話すことに少し慣れてきた学生たちは、物おじすることなく自己紹介を行い、2テーブルに分かれて、部員の方々と2テーマの意見交換を行った。

テーマは「都会と田舎どちらに住みたいか」、「やりたいこととできること、どちらを仕事にすべきか」という2テーマで、社会人の方のご経験とご意見を伺いながら、学生側の素直

な意見を伝えていた。部員の方々は熱心に学生の意見を聞いてくださり、ご自身の実体験、それを受けてのこれからの目標を話してくださると同時に、アドバイスと大きな励ましをくださったという。学生は、大人の方々に、これほど真剣に話を聞いてもらい、意見を尊重されるような機会が今まで少なかったと語り、大変勉強になり、思うところをいつもよりうまく話すことができた、交流後に話していた。

人生経験から出てくるアドバイスは、学生たちの心に強く響いたようで、それぞれが事後レポートに、心に刺さったエピソードやいただいた言葉をあげ、このような機会があったらぜひまた参加したいと結んでいた。先方からも、同じ年齢の頃を思い出し、初心に戻ることができた、今の若い学生の率直な話を聞くことができ、参考になった、ぜひまたやりたいたいとおっしゃっていただけた。双方ともに、もっと話したかった、と口にしながらいよいよ、予定時間を超える盛り上がりぶりであった。



### 3-4-5 成果報告会

2021（令和3）年3月18日、今回訪問した企業での学びをまとめた成果報告会を開催した。これも企業訪問を開始した2017年度から行っているもので、企業訪問をただの社会見学に終わらせることなく、学生が自身の目で見たことや、頭で感じたことを学生同士で共有し、自身のキャリア形成に役立ててもらふことや、訪問先企業関係者に聞いてもらうことで、学生の視点がどこにあるのかを認識してもらうことを目的としている。

2019年度の成果報告会はコロナ禍により、学生が集合することができなくなったことや、企業の招聘が不可能になったこと、さらに北海道全域に緊急事態宣言が発令されたことから報告会は中止となったが、今年度は感染拡大に最大限の注意を払った上で、対面方式での報告会を開催することを決定した。

日 程：2021（令和3）年3月18日（月）

場 所：札幌国際大学 2号館1階

参加企業：空間工房株式会社（滝川市）

株式会社三笠精算事務所パートナー保険サービス（岩見沢市）

参加団体：一般社団法人北海道商工会議所連合会

リモート参加：北海道新聞社

報告会は2部構成となっており、第1部では学生たちが分担をして、今回の訪問の概要と、そこから学んだことについて、スライドを作成して報告を行った。その後、第2部では参加者全員が顔を合わせ（距離を確保して）、意見交換を行った。

学生たちは、「働くこと」に対して今まで持っていた「ねばならない」の意識からかなり解放され、自分なりの目的のため、目標をもって自主的に行うことであるということ、その目的や目標は、個々で異なっていてよく、正誤はないということを強く実感したようである。発表の中には、今回の訪問で、強く興味を抱いた業界について詳しく調べ、自分の目指す方向性について語ってくれたものもあった。何より、「スーツを着た大人」に対して怖気づいてしまうことが多かったが、交流を通して、特別委縮することなく向き合えるようになったという感想もあった。

学生は、未知のもの、慣れないものに対して抵抗感を抱き、しり込みをする傾向がある。より多くの学生が、このような機会を活用し、「大人と話せるようになること」「自分なりの目標を見つけ、堂々と語れるようになること」ができるように、キャリア教育の一環としてこのような活動を継続することが求められよう。また、企業側も、熱意や自信を語ることで、自然と学生の共感を生むように、自分たちの仕事や目標を学生目線で語ることで、目を向けてもらうことができると考える。



#### 4 まとめに代えて

道商連との道内中小企業連携プロジェクトは6年間進めてきたが、学生の就職時の企業選択の意識変化や、働き方の涵養について、また企業と大学のコラボレーションのあり方については一定の活動、また研究を進めることができたと考えられる。しかしながら、例年課題となっている、道内中小企業への就職の増加という目標に対しては、本プロジェクトの形で大きな影響を与えることはできないと断じざるを得ない。

そもそも本プロジェクトは「学生の中小企業への就業者増加」を第一義に掲げたものではなく、将来のキャリア意識の形成や、就職に際し視野の拡大を図ることで選択肢を増やすことを目的としたものであり、それらは社会人講座や企業訪問により、「参加した学生」の意識に影響を与えていることは確実である。しかしながら、2つの点において課題が残る。

1点目はこれが全学向けの仕組みとなっていないことにある。一部教員の研究活動の一環として行っていることや、スケジュール調整が困難なことから、社会人講座や企業訪問の対象学生は一部の学部・学科に偏っている。よって、大学全体としては、本プロジェクトが意図した学生の意識改革にはつながっていない。現代の就職活動は大学の支援体制が必要不可欠となっており、特に本学ではキャリア教育の充実をうたっている以上、全学を上げてこのような活動を推進することが必要である。しかしながら、3学科対象、1日だけの社会人講座のスケジュール調整だけでも教員には困難な業務となっており、今後継続を検討するのであれば、各学部・学科だけでなく、全学共通教育部や教務部、キャリア支援センターなどの関係部署が連携していくことが求められる。予算計上や学内での活動の認知度の向上など、課題は多く残る。

2点目は、意識の定着である。社会人講座や企業訪問を実施した直後は、学生の意識は変化するものの、実際に就職活動を進める時期まで継続性がないため、意識が続かないことは想像に難くない。この事業の効果をその場限りにせず、常に意識させることで初めて、就職活動に大きく影響を与えることができる。これらをどのように通常の正課教育、カリキュラムに取り込むことができるかを検討しなければ、この事業は有志参加の「イベント」の扱いになり、効果が薄くなる。

加えて、今年度の新たな課題は、オンライン就活、テレワークの拡大における過渡期であることが挙げられる。大企業のようにオンライン環境が整備されていない地方都市の中小企業では、就職活動や実際の業務においても対面活動が中心であり、コロナ禍の状況では、求人だけでなく、実際の業務にも影響が出ることも予想される。もっとも、今回の協力企業は商工会議所の青年部が中心となっていたこともあり、新技術の導入にも比較的積極的である。社会の変化にあわせて、事業内容も常に変化・改善を目指すことが重要であり、企業・大学双方に求められる。

以上のような課題は残しつつも、大学と企業がコラボレーションにて、学生の就業観、キャリア意識の形成を進める本研究は、学生、企業、そして教員にとってもメリットがある活動であったことは間違いない。今後はこれらをどのようにカリキュラムやイベントへと昇華し、定期的実施するかという、運用面でのブラッシュアップを図るステージへと進むべきであろう。また、学生の成長の可視化などにより、数字として表現できる効果測定も必要となる。事業から授業への転化のために、さらなる研究の深化が求められる。

---

# 札幌国際大学地域連携センター年報 第5号

---

2021(令和3年)年9月 発行

編集 札幌国際大学地域・産学連携センター

発行 札幌国際大学

〒004-8602 札幌市清田区清田4条1丁目4番1号

電話011-881-8844 FAX011-885-3370

---